

筑前高鳥居城跡

福岡県糟屋郡須恵町所在山城の調査

序

本書は平成13年度に須恵町教育委員会が福岡県教育庁福岡教育事務所の協力の下、発掘調査を行った「高鳥居城跡」の調査記録です。

高鳥居城跡が所在する岳城山は豊かな自然を誇る若杉山系にあり、山頂からは博多湾や福博の町並みは勿論のこと、同じく中世の山城があった立花山も見渡せる町民の多くに親しまれている名所であり、今回の調査によって高鳥居城の歴史を探る上で貴重な成果を取ることができました。

この報告書が中世山城の研究資料として広く活用されるとともに、一人でも多くの方に生涯学習の場で利用していただければ幸いです。

おわりに、今回の発掘調査及び報告書刊行にあたり、多大なご指導を頂きました関係各方面の方々並びに、酷寒のなか発掘調査に従事して下さいました地元の皆様に心より感謝申し上げます。

平成15年3月31日

須恵町教育委員会
教育長 東 好男

例 言

1. 本書は、須恵町産業開発課による展望台建替に伴って調査を実施した、福岡県須恵町須恵1番地に所在する埋蔵文化財－高鳥居城跡－の発掘調査の記録である。
2. 本書に掲載した遺構図は高山慶太郎・安河内高利・吉村靖徳が作製した。遺構写真は吉村が、遺物写真は高山の撮影による。
3. 出土遺物の実測および製図は吉村が行った。
4. 本書の執筆は第5章を中西義昌が、その他と編集は安河内・山下啓之の協力のもと吉村が行った。

本文目次

第1章 調査の経過	1
第2章 位置と環境	2
第3章 調査内容	4
第4章 調査のまとめ	12
第5章 筑前高鳥居城の縄張りとは戦国後期の地域情勢	20

図版目次

図版1	1 高鳥居城跡遠景	2 高鳥居城跡からの眺望1
	3 高鳥居城跡からの眺望2	
図版2	1 発掘調査前の展望台	2 発掘調査地全景1
	3 発掘調査地全景2	
図版3	1 1・5号土坑	2 2号土坑
	3 3号土坑	
図版4	1 遺物出土状況	2 礎石?検出状況
	3 散在する礎石	
図版5	高鳥居城跡出土遺物	
図版6	高鳥居城跡表採遺物1	
図版7	高鳥居城跡表採遺物2	

挿図目次

第1図 周辺遺跡分布図 (1/50,000)	2
第2図 発掘調査地周辺地形図 (1/400)	4
第3図 遺構配置図 (1/40)	5
第4図 土坑実測図 (1/20)	6
第5図 高鳥居城跡出土遺物実測図 (1/3)	7
第6図 高鳥居城跡採集遺物実測図1 (1/3・1/2)	8
第7図 高鳥居城跡採集遺物実測図2 (1/4)	9
第8図 高鳥居城跡採集遺物実測図3 (1/4)	10
第9図 高鳥居城跡採集遺物実測図4 (1/4)	11

第1章 調査の経過

平成13年9月に町産業開発課より、岳城から西に派生する尾根上に昭和49年に設置された既存展望台の建替計画が教育委員会に知らされた。開発対象地は周知の埋蔵文化財包蔵地「高鳥居城跡」に含まれるため、教育委員会で文化財の有無を把握するために9月28日に重機を用いて確認調査を実施した結果、遺構の存在が明らかとなった。産業開発課による展望台建替の事業は当該年度に完了しなければならず、遅くとも年内に発掘調査を完了する必要があるため、速やかに本調査を行う運びとなった（関連文書／届出：13須社教発第110601号 平成13年11月6日、勧告：13教文調第3号の479 平成13年12月6日、報告：13須社教発第121301号 平成13年12月13日）。須恵町には文化財専門職員が不在であったため、県教育庁福岡教育事務所に対して派遣依頼を行い、教育事務所職員が実施中である古賀市の県道建設に係る発掘調査が終了し次第、本町の現場に赴くことで合意した。

発掘調査は平成13年12月14日の重機による既存施設撤去に続いて作業員を投入し、同日より調査を開始した。19日までに上層遺構の掘削を終え、清掃後、全景写真撮影を行う。翌20日に遺構実測。21日から旧表土層上の整地層を除去する。25日までには下層遺構の掘削等を終え作業員を撤収。翌26日に平板による調査区周辺の測量を行い現地調査を完了した。

平成13年度（調査）・平成14年度（報告書）の組織は次のとおりである。

総括・庶務

須恵町教育委員会	平成13年度	平成14年度
教育長	中嶋 裕史（～平成14年1月）	東 好男（平成14年3月～）
社会教育課長	平嶋 峰晴	平嶋 峰晴
歴史民俗資料館長	高山慶太郎	高山慶太郎
社会教育課長補佐		吉松 良徳
主事	安河内高利	安河内高利
		山下 啓之（平成15年1月～）

調査

福岡県教育庁福岡教育事務所

生涯学習課主任技師 吉村 靖徳 吉村 靖徳

発掘作業員

小山田竹雄・新井元植・畑江晃・百田次雄・藪光喜

なお、調査にあたっては須恵町産業開発課の荻純敬・百田敦氏、宇美町教育委員会の平ノ内幸治氏、亀井清氏、小田勝美氏の協力を得た。記して感謝いたします。

第2章 位置と環境

地理的環境

当遺跡が所在する須恵町は県の中央部よりやや西寄り、福岡市の中心から東へ12kmに位置する。糟屋郡の南部にあたり、東はショウケ越を挟んで嘉穂郡に接し、南は宇美町・志免町、西は粕屋町、そして北は標高678mの若杉山から西に派生する尾根頂部を境として篠栗町と接する。地勢的には北西部・南部の平野部とその他の山間部に分かれ、町の中央部を宇美町ツムリ谷に源を発する須恵川が西へ流れている。この須恵川はさらに西に流れ、宇美川と合流し多々良川となって博多湾に注いでいる。このような中、高鳥居城は町の北東端部の若杉山を盟主としてその西に連なる岳城山（別名、竹城山・武城・城山）山頂を含めて、そこから西に派生する尾根上に築かれている。なお地質的には、三郡変成岩や蛇紋岩（北部）・古第三紀層（中央部～南西部）・花崗岩（南東部）によって形成される。このうち、古第三紀層には石炭を多く含んだ部分が存在し、明治中期から昭和30年代にかけて多くの石炭が算出された。



- | | | | | |
|------------|-------------|-----------|--------------|----------------|
| 1. 高鳥居城跡 | 2. 福岡藩磁器御用窯 | 3. 賢聖院観音堂 | 4. 旅石遺跡 | 5. 天神畑遺跡 |
| 6. ヨムギ古墳 | 7. カヤノ古墳群 | 8. 城山古墳群 | 9. 桜塚横穴群 | 10. 大塚古墳群・横穴墓群 |
| 11. 尾黒古墳群 | 12. 柳坂古墳群 | 13. 才木古墳群 | 14. 平原サイケ尻遺跡 | 15. ラシガ浦南古墳 |
| 16. ラシガ浦古墳 | 17. 古大間遺跡 | 18. 鷹与丁遺跡 | 19. 牛ヶ熊遺跡 | 20. 乙植木山城戸遺跡 |
| 21. 乙植木古墳群 | 22. セタ池古墳 | 23. 光正寺古墳 | | |

第1図 周辺遺跡分布図 (1/50,000)

歴史的環境

旧石器時代では、1995年に資材置場・倉庫用地造成に伴って調査された乙植木山城戸遺跡（集石遺構・細石刃・台形様石器など）をはじめとして、これに南接する乙植木古墳群（細石刃・台形様石器）や平原サイケ尻遺跡（ナイフ形石器）、あるいは粕屋町所在の駕与丁遺跡（ナイフ形石器・台形様石器）等、町西部～粕屋町にかけての遺跡が知られている。続く縄文時代の遺構については明らかではないが、乙植木山城戸遺跡や平原サイケ尻遺跡において石鏃が出土・採集されており、旧石器時代から継続する遺跡としてあげられる。

弥生時代では、甕棺が出土した旅石遺跡や天神畑遺跡・古野遺跡などの墓地・集落が低台地や微高地上に営まれる程度で概して当時期の遺跡分布は稀薄である。近接する粕屋町では弥生時代早期～前期にかけての集落・墓地がセットとなる江辻遺跡が著名な遺跡として存在する。

古墳時代になると町内においても遺跡数が急増し、ヨムギ古墳・城山古墳群・才木古墳・乙植木古墳群・尾黒古墳群といった古墳が若杉山塊から派生する丘陵部に築造される。そのほとんどが小規模な群集墳であるが、近接する宇美町においては全長54mの古式前方後円墳である光正寺古墳や、これに接した志免町に径29mの七夕池古墳があり、ともに国の史跡に指定されている。また、天神山横穴墓群・桜塚横穴墓群・上川原横穴墓群などの横穴墓も散見される。一方、集落の代表例として牛ヶ熊遺跡があり、ここでは古墳時代前期～後期にかけての住居跡が確認されている。なお、この遺跡からは滑石原石のほか滑石白玉等の製品や石屑が大量に出土しており、当該期の工房跡として注目される。

飛鳥時代以降の遺跡については詳らかではないが、須恵町が所在する糟屋郡は京都妙心寺の日本最古の梵鐘（698年）にみえる「糟屋評」にあたる。銘には「戊戌年四月十三日壬寅收、糟屋評造春米連廣國鑄鐘」とあり、梵鐘はこの一帯で鑄造されたことが知れる。

平安時代末期では、佐谷の観音谷から天治3（1126）年銘を有する例を含む5基の経筒（青銅製2基・陶製3基）が出土している。

また鎌倉時代では、同じく佐谷の建正寺境内に正中2（1325）年銘の板碑が存在する。これは正和3（1314）年7月15日から宮崎宮で読誦されはじめた妙法蓮華經一万部が、この年の7月15日に11年間かけて賢聖院（＝建正寺）で最後の一卷を読みおえたことを記念したもので、現在、県の指定を受けている。

下って、戦国時代の代表的な遺跡として本書で報告する高鳥居城跡をあげよう。高鳥居城跡は若杉山から西に延びる尾根の頂部、岳城山（標高381.4m）を本丸とする。文献に高鳥居城が見えるのは宝徳二（1450）年であり、筑前守護大内氏の居城とされる。また江戸時代では宝暦年間に福岡藩寺社司の下吏、新藤安平によって開窯された須恵焼の窯跡がある。上須恵には黒田藩磁器御用窯跡が遺存している。発掘調査は実施されていないものの、古絵図によれば窯本体・物原・陶器所跡・試験窯跡が存在するようである。

第3章 調査内容

本調査地は岳城山頂から西に延びる尾根筋の西端部（標高368m）に位置し、60m×26mほどの規模を有する曲輪の西端部にあたる。調査に至る契機が展望台建替に伴うものであることから知られるように、北は立花城跡から、西～南西に目を転じると博多湾及び福岡平野が一望できる非常に眺望のきく場所に占地する。発掘調査の対象地はすでに展望台の基礎によって遺構面が掘削されていることが想定できたため、遺構の有無確認を目的として工事対象地よりも周辺域に若干の余裕をとって表土剥ぎを行った（第2図）。その結果、展望台中央部に深く入れられたコンクリート基礎部分とそれを取り囲むように巡る溝状の基礎部分以外において遺構の存在を確認した。遺構面は北東部が最も浅く、表土下25cmで、調査区南辺中央部では表土下80cmが検出面となる。つまり、遺構面は北東部から南西部に向かって傾斜している状況であった。

調査で確認した遺構は柱穴列1条・土坑5基・ピット・整地層である。

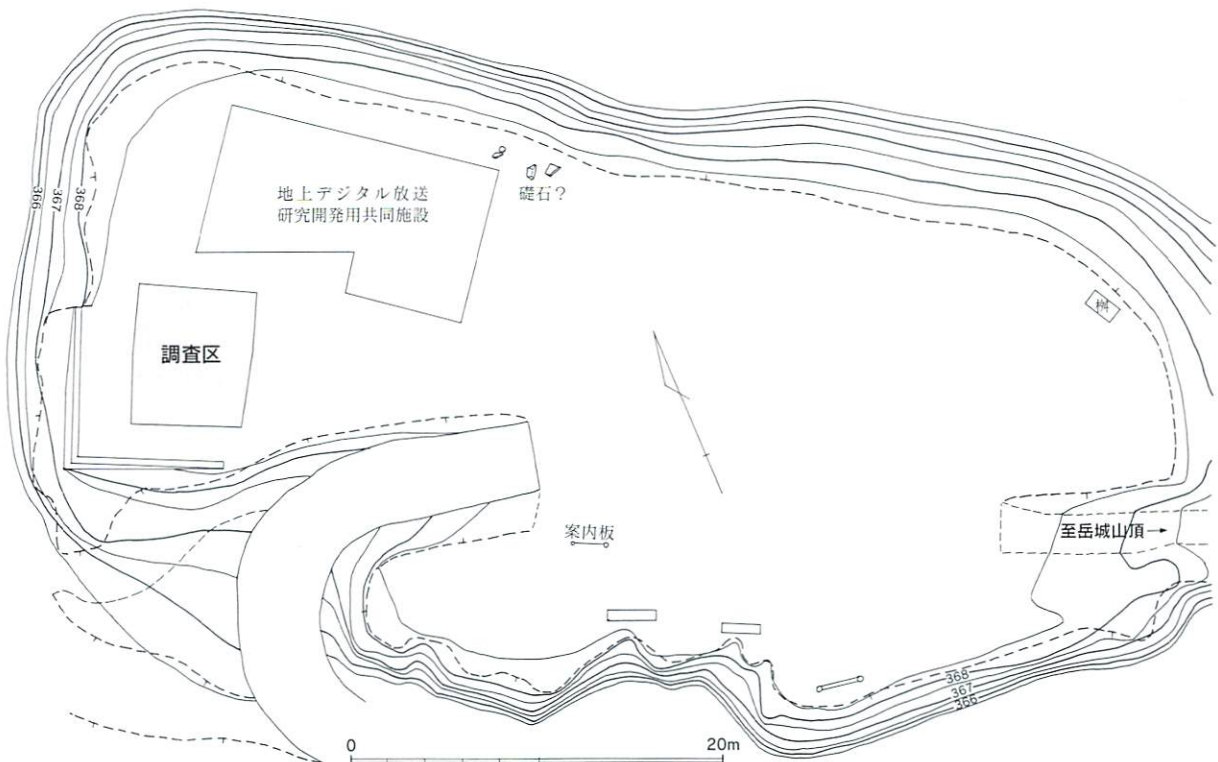
検出遺構

柱穴列（図版2、第3図）

調査区の中央部で2間分確認した。柱穴の規模は径20cm、深さ13～16cmで、柱間はP1－P2が2.05m、P2－P3が2.10mを測る。掘立柱建物跡になる可能性もある。柱穴列の軸はほぼ南北方向である。

土坑

1号土坑（図版3、第4図）

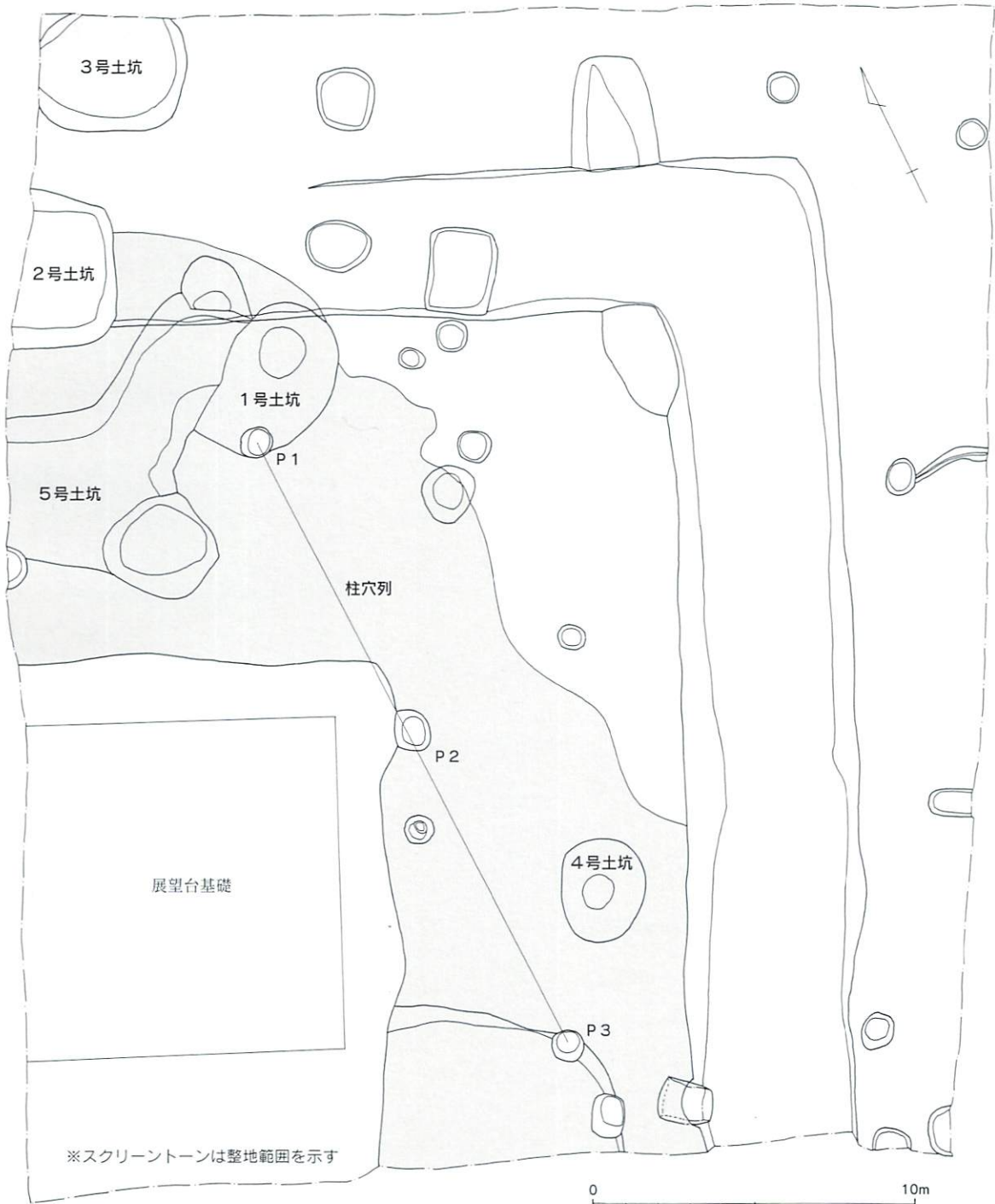


第2図 発掘調査地周辺地形図（1/400）

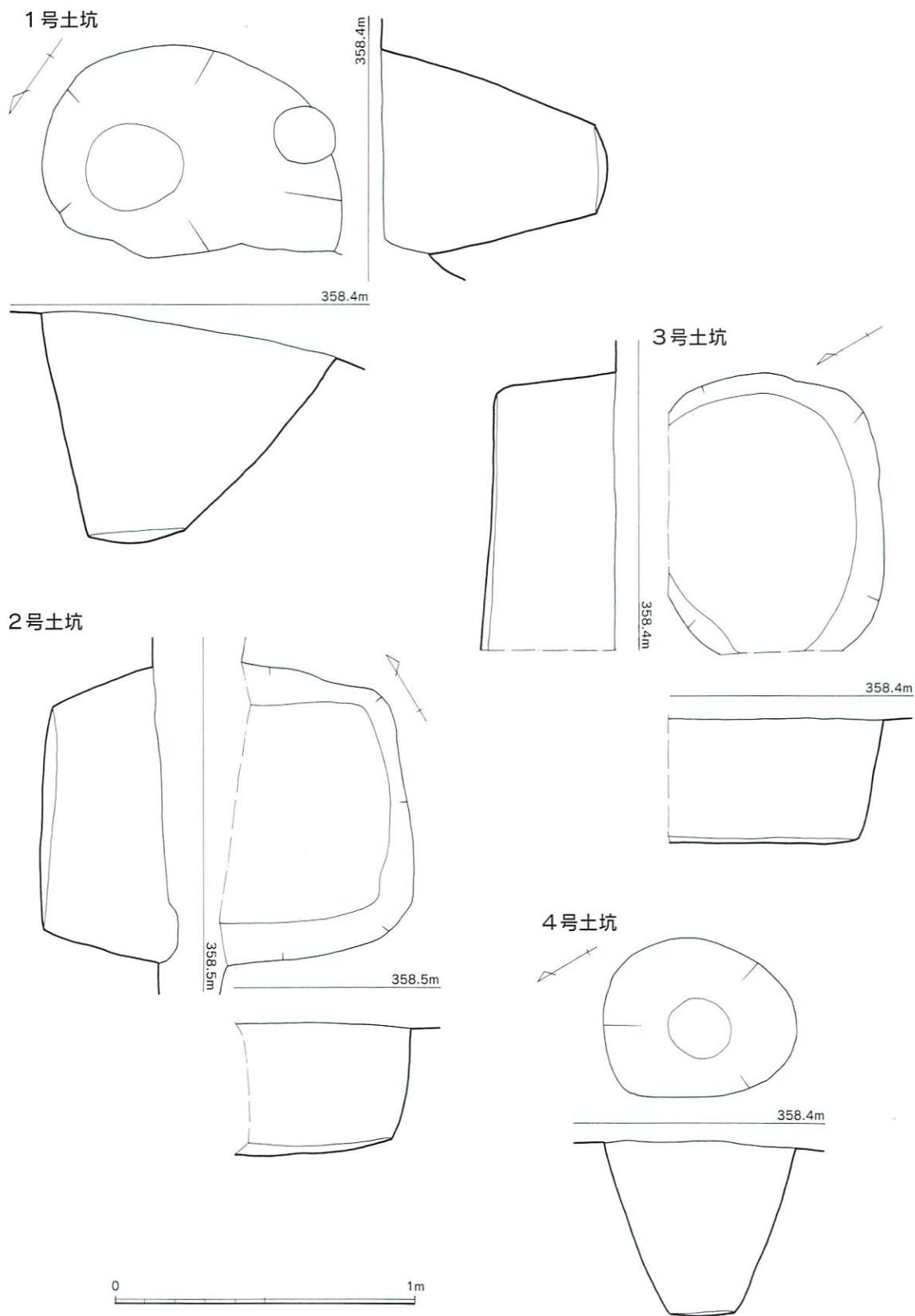
調査区の北西部、整地層除去後に検出した楕円形の土坑である。長径1.0m、短径0.7m、深さ0.8mを測る。西側で5号土坑と連結するが切り合い関係は確認できなかったため、あるいは一連の遺構である可能性もある。

2号土坑 (図版3、第4図)

調査区の北西部、西壁際で検出した。西側はさらに調査区外に広がるが、平面プランは隅丸方形を呈するものと考えられる。南北長1.0m、東西長は0.65m以上である。深さ0.4mを測る。埋土は上層が炭化物を少量含む淡茶褐色土、下層が暗黄褐色粘質土である。



第3図 遺構配置図 (1/40)



第4图 土坑实测图 (1/20)

3号土坑 (図版3、第4図)

調査区の北西隅部で検出した楕円形の土坑である。一部調査区外に広がるが、現状で長径0.5m、深さ0.4mを測る。埋土は淡茶褐色土。

4号土坑 (第4図)

調査区の南東部で整地層除去後に検出した楕円形の土坑である。長径0.6m×短径0.5m、深さ0.5mを測る。

5号土坑 (図版3、第4図)

調査区の北西部、1号土坑の西で検出した不整形の土坑である。整地層除去後に確認した。

整地層 (図版2)

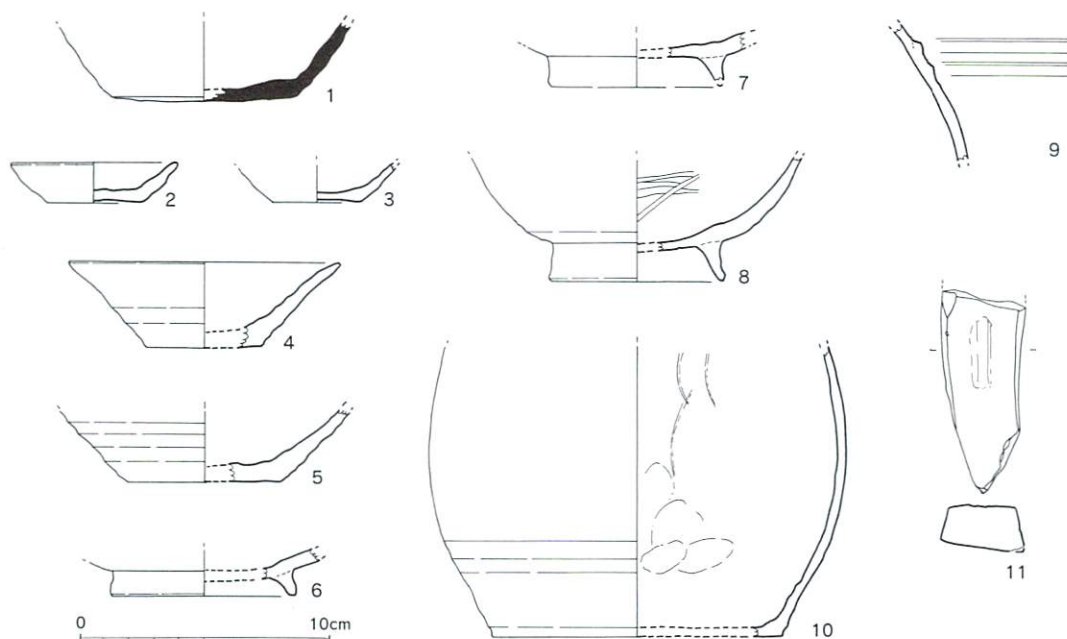
調査区の北東部ではすでに地山が露出していたが、南西部分においては整地層が確認された。旧地形は南西部に向かって緩く傾斜しており、そこに平坦面を作るため黄褐色砂質土による整地がなされている。最も厚い部分では20cmほどが盛り土されている。なお、整地は旧表土層を残したまま直接行われており、下部の旧表土面において1号土坑・4号土坑・5号土坑・ピットを確認した。

礎石 (図版2・4、第3図)

調査区の南東部で検出した30cm×20cmの平石は整地層の中に埋め込まれており、礎石の一部である可能性が考えられる。

出土遺物 (図版5、第5図)

須恵器



第5図 高鳥居城跡出土遺物実測図 (1/3)

杯（1）調整は体部がヨコナデ、底部内面はナデ、底部外面はヘラ切りのちナデ。色調は淡灰色。復元底径7.4cm。廃土中より出土。

土師器

小皿（2・3）2の法量は口径6.6cm、底形3.8cm、器高1.6cm。3は復元底径3.4cm。ともに糸切り。3号土坑から出土した。

杯（4～6）4の法量は復元で口径10.8cm、底径4.6cm、器高3.4cm。2号土坑出土。5は底径6.0cm。外面はヨコナデによる凹凸著しい。ともに調整はヨコナデ。糸切り。色調は淡黄褐色を呈する。3号土坑出土。6は高台杯。復元底径7.4cm。黄褐色を呈する。4号土坑出土。

黒色土器

杯（7）高台部の小破片。1号土坑出土。

椀（8）内面のみ燻すA類の黒色土器。調整は体部外面がヨコナデ、底部は回転ヘラケズリ、内面はミガキ。法量は復元で高台径7.0cmを測る。色調は暗黄褐色を呈する。1号土坑出土。

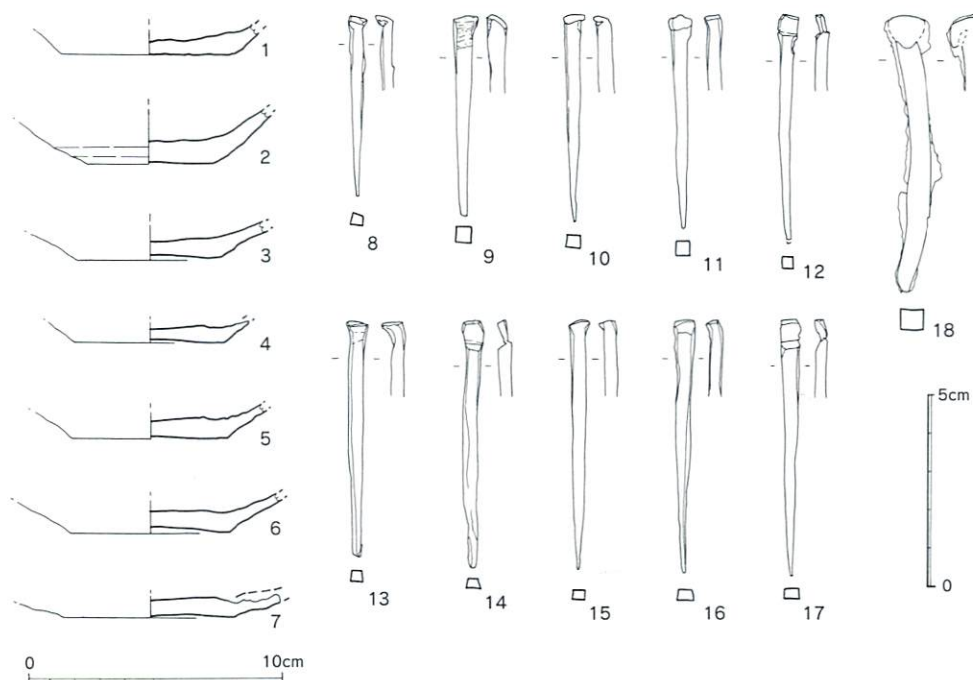
陶器

壺（9・10）肩部の破片で二条の突帯をもつ。胎は茶褐色で外面に黄茶色の釉を施す。調整は内外面ともナデである。3号土坑から出土。10は壺の下半～底部にかけての破片。胎は暗茶色で、内面に暗黄白色の、外面には黄白色の釉を施す。底部は露胎となる。内面には同心円のアテ具痕が認められる。非常に薄い作りである。黄褐色整地層出土。

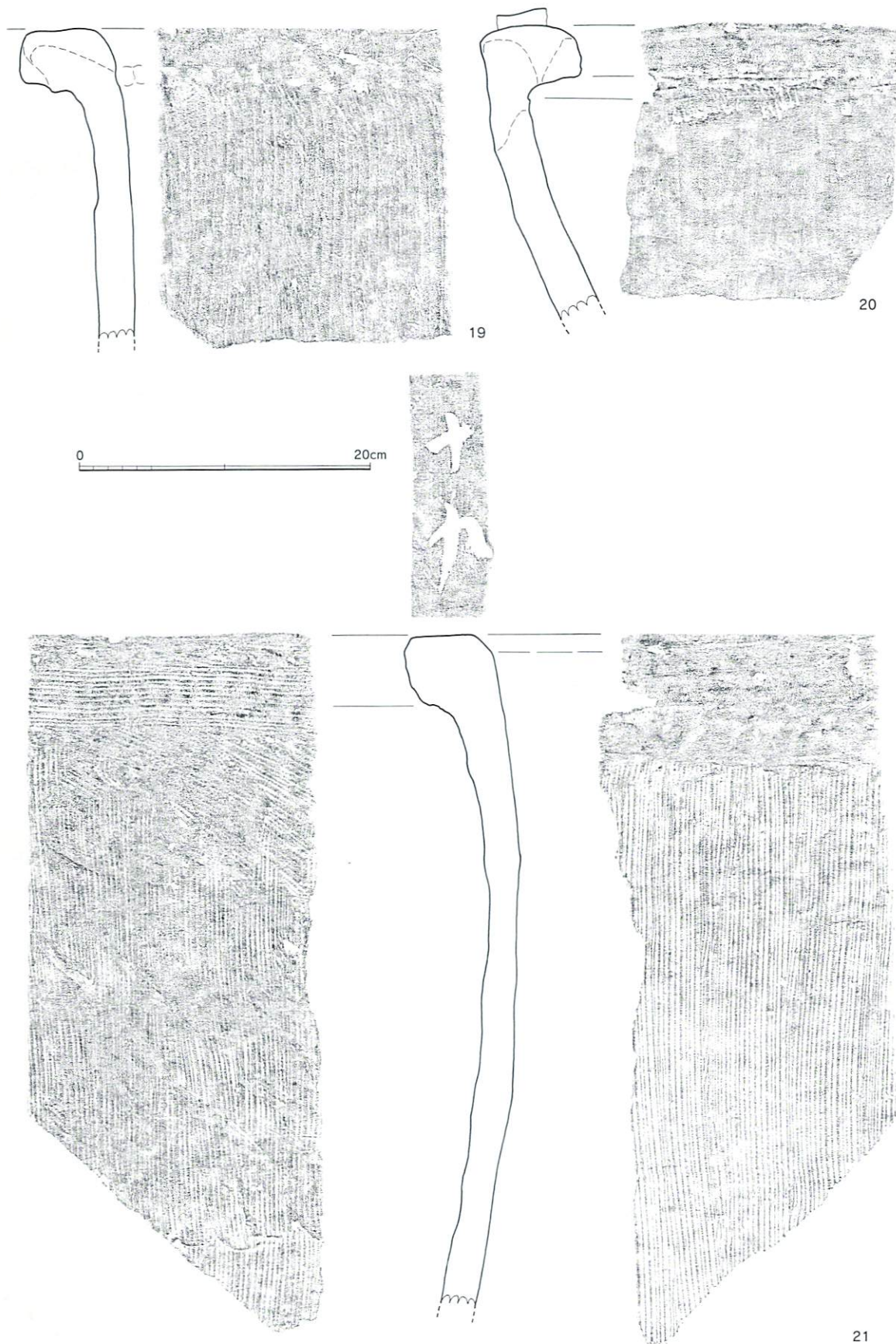
砥石（11）砂岩製の砥石で半分ほどを欠いている。整地層から出土。

高鳥居城跡採集遺物（図版6・7、第6～9図）

以下は現在、須恵町歴史民俗資料館に保管されている遺物である。かつて高鳥居城跡から採集されたものであるため、あわせてここで報告する。採集地点等の詳細については不明である。



第6図 高鳥居城跡採集遺物実測図 1 (1/3・1/2)

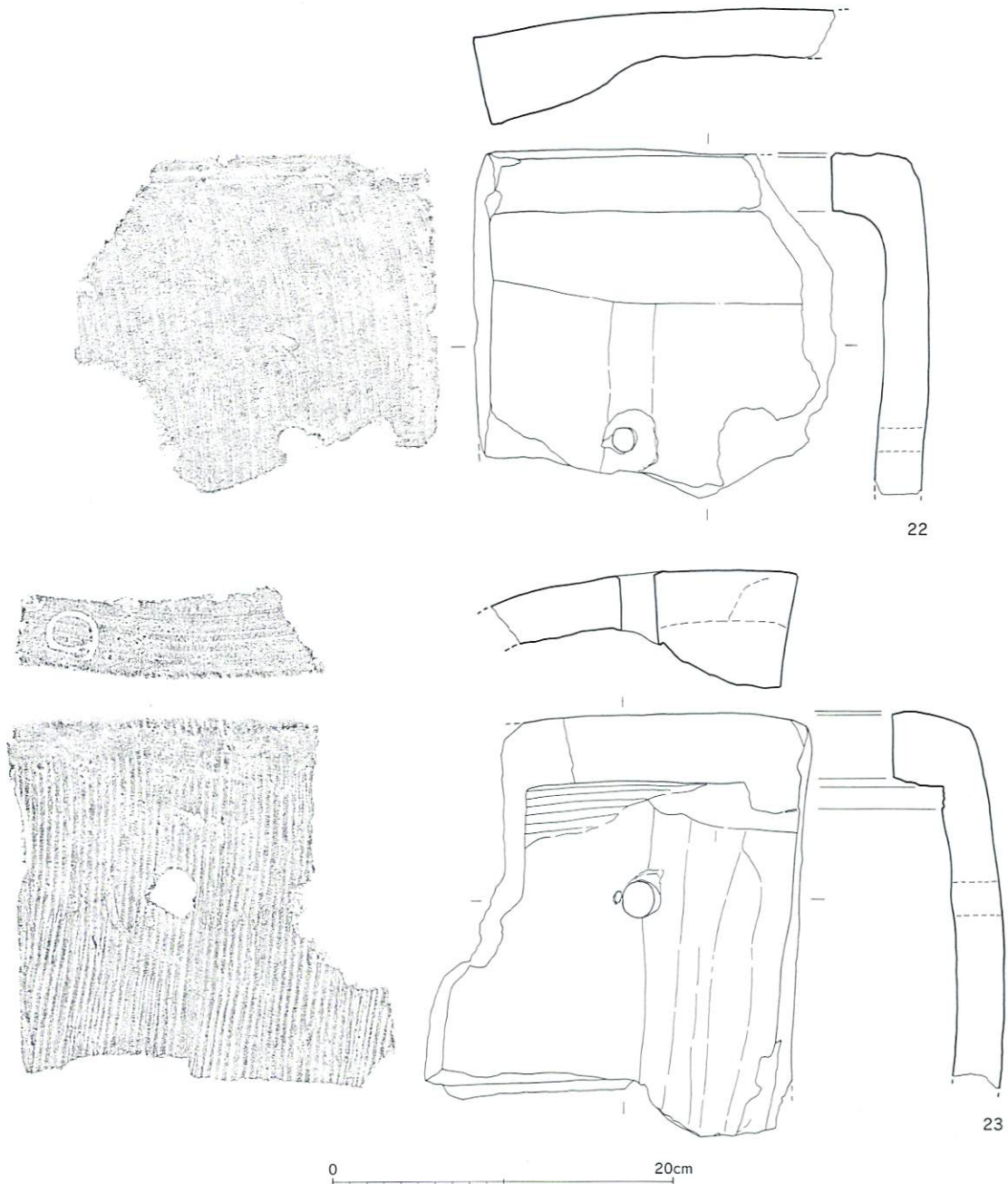


第7図 高鳥居城跡採集遺物実測図 2 (1/4)

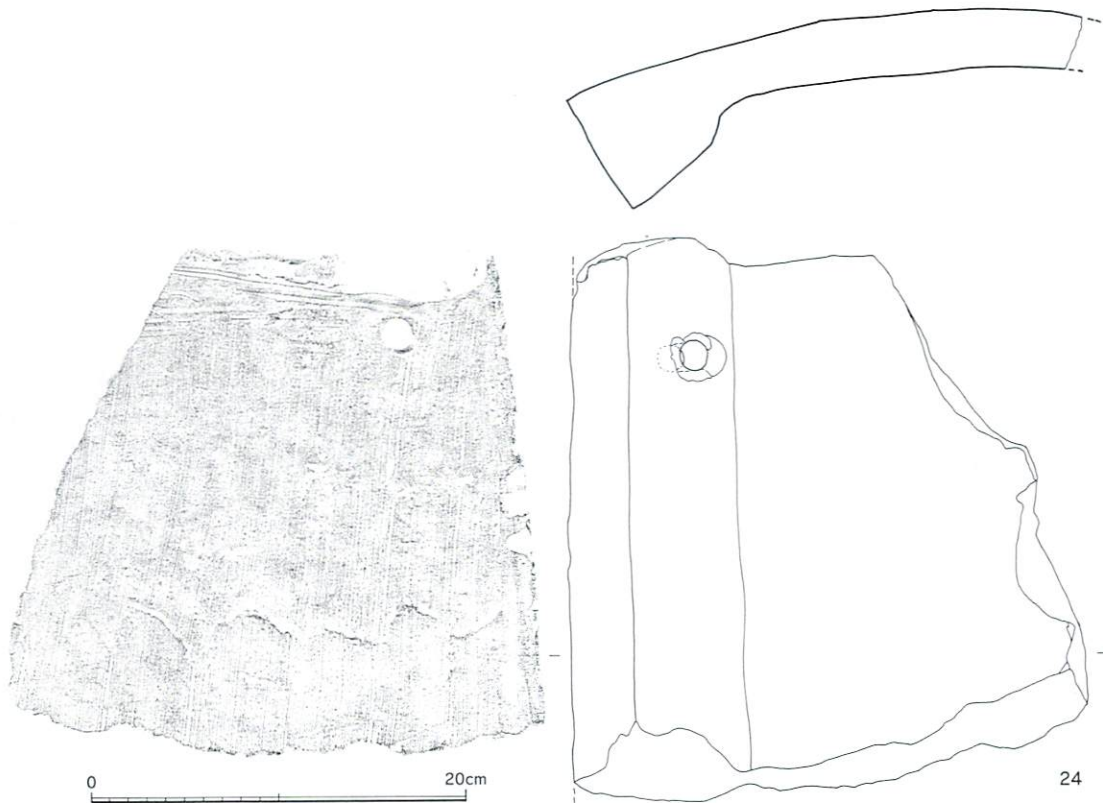
土師器

小皿（1～7）1がへら切り未調整のほかは糸切り。調整は底部内面はナデで、7には板状圧痕が残る。2～7の底径は5.0～7.8cm。1・7には「岳城1975」の注記あり。

鉄釘（8～17）あまり錆化していない8～17と、錆化が著しい18がある。ともに、頭部を折り曲げるタイプの角釘である。前者の長さは4.7cm～6.7cmで、横断面は8・10・11が4mm×4mm、9が4mm×5mmで、他は3mm×4mmである。この中には9のように木質が遺存している例があることから実際に使用されたものも含まれていることが知れるが、12・14・17については頭部が立っているため未使用品と考えられる。18は長さ7.2cm、横断面0.55mm×0.65mm。



第8図 高鳥居城跡採集遺物実測図 3 (1/4)



第9図 高鳥居城跡採集遺物実測図 4 (1/4)

陶器

甕 (19~21) すべて大形甕の口縁部である。19は口縁部を内側に屈曲させるタイプ。調整は口縁部がヨコナデ、内外面はともにタテ方向の粗いハケ。外面の端部から少し下がった位置には成形時の指頭圧痕が残る。器壁は2.6cmほどと厚い。胎土に砂礫を含む。内外面に茶褐色の釉を施す。20は口縁部を外方に屈曲させるタイプ。調整は口縁部がヨコナデ、内外面はともにタテ方向のハケ。器形的には胴部が膨らむものである。器壁厚は2.8cmを測る。口縁部上面には陶器片が融着している。胎土に砂礫を含む。内外面に茶褐色の釉を施す。21は口縁部を内側に屈曲させるタイプで、胴が張らずに19と同じような器形になる。口縁部の調整は外面がヨコナデ、内面は横方向のハケ。胴部は内外面ともにタテ方向のハケで19のそれよりも細かい。器壁厚は2.0~2.6cmを測る。なお、口縁部の平坦面には「十九」のへら書きがある。胎土に砂礫を含む。内外面に茶褐色の釉を施す。復元口径は約110cm。

陶器製品 (22~24) いずれも甕の製作手法でつくられた陶器の製品である。22・23は19・21と同様の形態で、それぞれ5cm・7cmほどの厚さに測辺部を肥厚させている。21の調整は口縁部がヨコナデ、口縁部内端面はケズリのちヨコナデ。外面はタテ方向のハケ、内面はナデである。器壁に径1.4cmの穿孔が内側から施される。外面には黒茶色~茶褐色の釉がかけられる。22の調整は口縁部がハケのちヨコナデ、口縁部の内端面から下面にかけてはケズリ。外面はタテ方向のハケ、内面はナデである。器壁に径2.1cmの穿孔が内側から施される。外面には黒茶色の釉がかけられる。口縁の平坦面には「○」のへら書きがある。胎土は精良で砂礫を含む。内外面に茶褐色の釉を施す。24も22・23と同様の作りであるが上部・下部を欠失する。調整は内外面ともハケである。径1.5cmの穿孔が施される。

第4章 調査のまとめ

高鳥居城跡については中西義昌によって縄張り図が作成されており、文献・表面観察による詳細な検討が行われている。しかしながら、これまで発掘調査による成果は皆無であった。今回の発掘区の隣地には昭和48年6月に「地上デジタル放送研究開発用共同利用施設」が設置されたが、この際には事前の調査が実施されずに遺構は損壊を受けている。

今回は極めて限られた範囲の発掘ではあったものの、遺構として柱穴列1条（掘立柱建物跡か？）・土坑5基・ピット・整地層を確認することができた。これらの遺構は、黄褐色土による整地を基準とすると整地以前（1・4・5号土坑、ピット）と整地層以後（柱穴列・2号土坑）に分けることができる。一方、出土した遺物は、2・3号土坑からは16世紀半ば以降の土師器小皿・杯が、1・4号土坑からは10世紀中頃の内黒土師器椀・土師器杯が出土しており、先の切り合い関係を勘案すると自然地形を利用したⅠ期（1・4・5号土坑）と、整地を伴うⅡ期（2・3号土坑、柱穴列）に分けて捉えることができよう。Ⅰ期については、第5図-1にみられる8世紀後半代の須恵器杯の存在より、この地に奈良時代後半から継続して営みがあったことを示唆している。Ⅱ期は高鳥居城が機能していた時期にあたる。高鳥居城の詳細については第5章の中西論文に詳しいが、出土遺物から見る限り1586（天正14）年の星野吉實（鎮胤）・吉兼（親胤）兄弟と立花統虎の攻防の時期と概ね齟齬をきたさない。なお、発掘区南東部で確認した20cm×15cmほどの礎石と考えられる平石が存在し、当該調査区が存する曲輪北辺部に散在する礎石？とともに注意される。

調査区の性格については、遺構の上からは明らかにし難いものの、60m×26mといった高鳥居城跡最大の面積を有する曲輪であり、星野氏の顕彰碑が存する岳城山頂（381.4m）と対峙する城の中心的な曲輪であることには間違いない。今後、虎口位置の把握・建物配置等を含めた、さらなる構造の解明に向けた調査が俟たれる。

以下、高鳥居城に関する記述を須恵町誌（須恵町誌編集委員会編『須恵町誌』1983年）より抜粋掲載しておく。

（1）河津筑後守貞重の築城

中世の山城であった高鳥居城の跡は、若杉山に連なる岳城山の山頂に、上下三段の平地となって残っています。岳城山（381.4m）は竹城あるいは武城とも書かれ、須恵・上須恵ではふもとの一帯を含めて単に城山と呼んできました。

高鳥居城は筑前に数多くあった山城のなかでも特筆すべきもので、筑前守護大内氏（周防の山口に居住）の筑前守護代の居城でした。史料の上で初めて高鳥居城が見えるのは宝徳二年（1450）、大内氏の筑前国内における拠点として登場してきます。

合屋武城著『筑前若杉郷土誌』によれば、斉明天皇の時代（655～661）に岳城山の中腹に石の大鳥居が建立され、後世この地を「高鳥居」と呼ぶようになった、ということです。また鎌倉時代初期の鎮西奉行天野遠景が初めてこの山に城砦を築いた、とも述べています（いずれも史料の裏付けを欠いていて史実であるかどうかははっきりしません）。

はるか後年の編纂ではありますが宝永三年（1706）の序文をもつ「河津伝記」には、永仁元年（1293）に河津筑後守貞重が高鳥居城を新築したと書かれています。

〔史料〕

(前略) 其子孫次郎貞重、伏見帝ノ永仁元年三月、九州ノ探題平兼時ニ属テ、長州ヨリ始、筑前ニ来リ、粕屋郡迫門河内七百町賜リ、高鳥井ノ壘ヲ新築シ、探題附庸ノ城トシテ、是ヲ守衛シ、同小仲庄ニ居住シ(中略) 高鳥井ノ城ハ、今川了俊迄附城トス。大内義弘代ヨリ大内ノ領トナリ、天文ノ比迄、彼幕下杉、麻生、河津等、彼城ヲ守ル。則文書数通顕明也 貞重嗣子河津次郎重房ニ到、乾元元年ノ頃、九州大ニ乱、大友、少弐、菊池、島津ノ徒、四方ニ散乱シテ、莊園ヲ争ヒ、日夜合戦止事ナシ。剩探題ノ命ヲ蔑シ、是ヲ攻撃ント欲ノ聞ヘ有ニ依、関東ヨリ其不服ヲ鎮ンタメ、将士余多指下サル。先宇都宮下野前司貞朝ヲ以、高鳥井ノ城ヲ守シム。(後略)

(「河津伝記」=『宗像郡誌』下編所収、による)

河津貞重は伊豆の伊東氏の流れをくみ、曾我兄弟とも近い縁戚関係にあたっています。父・祐重の代に長州に移り、貞重の時、鎮西探題北条(平)兼時に属して筑前に来たと伝えられています。

貞重が下向した永仁元年(1293)は、文永十一年(1274)・弘安四年(1281)と二度にわたった元寇(モンゴル襲来)の直後です。当時、鎌倉幕府は三たびモンゴル軍が攻めてくることを恐れ、長く九州北岸の警戒をおこりませんでした。しかし、戦後の問題はむしろ内政面にあり、モンゴル軍と勇敢に戦い、犠牲を払いながら恩賞にあずかれなかった鎮西御家人の間に、鎌倉幕府への不満が高まっていたのです。こうした鎮西(九州)の状況に対処するため、幕府の出先機関として新たに設置されたのが鎮西探題でした。外敵への警戒と幕府体制の防衛―貞重が築いた高鳥居城は初めから鎮西探題直属の城として重要な意義をもっていたと言えます。

このように高鳥居城が築城の当初から高い地位を占めており、室町期には大内氏筑前守護代の居城となるのも、その地理的位置の重要性があったからです。

古代・中世を通じて、北部九州の歴史は、ある意味では大宰府・博多をめぐる攻防の歴史でした。高鳥居城は、遠く博多湾から大宰府に至るまでを一望できる要地に築かれたのであり、そこはまた、筑豊方面から大宰府に抜ける八木山峠・ショウケ峠を扼する(おさえる)位置でもありました。

室町期に入ると周防(山口県)の大内氏と、豊後(大分県)の大友氏とは、筑前支配をめぐる次第に対立を深めていきますが、大友氏が立花山(糟屋郡新宮町と福岡市東区にまたがる)に立花城を築いてからは、大内氏にとって立花城と相対する高鳥居城の軍事的意義はさらに高まったとも言えます。

高鳥居城は、ある時は若杉城とも呼ばれたように、岳城山それ自体よりも後背の若杉山が意識されていました。軍記『高橋記』には「高取の固に抛りて若杉の地を擁す」という一節があって、若杉山と連なる高鳥居城の地理的な意味が語られています。

(2) 大内氏の筑前守護代

室町時代、高鳥居城は大内氏の筑前守護代杉氏の居城であり、守護所ともなりました。これは、今日にたとえれば福岡県庁が所在することに相当するわけで、当時において重要な意義を持つ城であったことがわかります。

大内氏は周防山口に本居を置く守護大名で、最盛期には周防・長門・豊前・筑前・安芸・石見・肥前の七ヶ国を支配下に置きました。大内氏の分国支配の要となったのは守護代です。戦国期には守護代は世襲化され、周防の陶氏、長門の内藤氏、豊前の杉氏(伯耆守の系統)、筑前の杉氏(豊

後守の系統)、石見の間田氏を守護代としましたが、守護代の世襲化によって「国内の大内家人や土豪を配下を配下の如く扱い、その限り国主大名に近い性格に上昇していることが考えられる」と指摘されています(福尾猛市郎『大内義隆』)。守護代は山口居住が原則でしたが、筑前守護代だけは現地に常駐しました。

大内氏が筑前への進出を開始するのは大内盛見の代になってからです(室町時代初期)。次の大内持世の時、文安四年(1447)頃から大内氏は筑前国を守護領国化し、翌五年には史料の上で筑前守護代があらわれてきます。この時点から大内氏の筑前国支配の体制は整えられたわけです。

(3) 守護所

守護代は、その名の通り「守護の代官」であって、筑前守護大内氏(山口に居住)の意を受けて、筑前統治を代行する存在です。守護代は日常の業務を行う「守護所」を設けていましたが、杉興運の代には「奉行機構」をもっていたことが知られています。守護代杉興運の家臣三名が守護所の奉行人として、守護代の意を奉じて下部に命令を発しています。

こうした整然とした組織をもった守護所が高鳥居城に置かれていたと考えられます。守護代は、一国単位の土地台帳をもっていて国内に年貢を課していたほか、国内交通路を掌握し、御家人には知行をあてがうなどの行為を行いました。

守護代は裁判権をもち、実際に領民が高鳥居城に提訴したことや、高鳥居城で訴訟が解決したことなどが、残された史料からわかります。

(4) 高鳥居城衆

高鳥居城には、守護代や奉行人だけでなく、糟屋郡の統治にあたる郡代と、守護代に直属する軍事力である「高鳥居城衆」が在城していたようです。高鳥居城衆には在勤の費用をまかなうために、高鳥居城料所が給付されていました。料所とは、その土地から徴収される年貢が特定の用途に指定されている土地のことで、この場合には高鳥居城在勤の費用にもつばらあてられていたものです。

杉興運の代に高鳥居城衆だった井原氏の場合、那珂郡内幡差分三町・糟屋郡篠栗内二町の地が高鳥居城料所でした。高鳥居城在勤の武士は糟屋郡内やその周辺に土地(必ずしも料所でなく所領のこともある)や代官職を持っていたと推定されます。

(5) 杉興運の最期

二代にわたって筑前守護代を世襲し、ともに高鳥居城を守護所とした杉興長と興運でしたが、天文二十年(1551)大内義隆が重臣陶隆房の反乱にあつて自害すると、杉興運も陶の軍勢をうけ、若杉山を落ち粕屋浜(多々良あたりカ)で討たれたと伝えられます。

陶の反乱軍が山口の町を襲ったのは天文二十年八月二十九日。栄華を誇った山口の町は火をかけられ、わずかな一行と共に日本海側の大寧寺まで逃れた義隆も、周囲を敵にかこまれ、ときの声を聞きながら部下の介錯で切腹して果てたのでした。これが九月一日のことです。

杉興運は陶方にはつかず、あくまで主君大内義隆と運命を共にしますが、どういうわけか三つの説があつて謎を残しています。

『大内義隆記の説』

大内義隆の寵臣相良武任は陶氏に恨まれていたが、義隆の死後、杉興運は相良を保護し、北九州の花尾城に籠らせていた。陶の軍勢は花尾城を襲って相良の首をとり、次いで高鳥居城に籠る杉興運のもとに殺到した。「杉豊後守ハ去年ノ春ノ比太宰少貳ニ任シヲ不吉ニコソハオモヒシニ、若杉山ヲ落行テ、カスヤノ浜ニテ討レケリ」—大内氏の代理として筑前を支配する杉氏にとって太宰府少貳氏は常に敵対する厄介な存在であった。少貳氏を討った杉興運が、こんどは太宰少貳という位に就いたのが、滅亡のきざしのように不吉に思われたというのである。ここでは、高鳥居城が落城し、粕屋浜で討たれてことになっている。

『隠徳太平記の説』

陶の討手は高鳥居城に迫る。杉豊後守太宰権少貳興連（運を連としている）とその子彈正忠隆景は、若杉山に籠りあくまで抵抗して死のうという気構えであった。しかし地元の武士たちは心がわりして陶に逆らう気はなく、杉親子はやむなく若杉山を落ちのび、津屋村まで来て討たれたのであった。最期の場所は糟屋郡の津屋村（多々良川の下流）であり、九月九日のこととする。

『中国治乱記の説』

これは前の二節とはまったく違う。大内義隆は、九月一日大寧寺で腹を切って死んだが、その時、共に腹を切った殉死者の中に、杉豊後守兼太宰少貳興連の名をあげているのである。若杉山を落ちていったのではなく、終始、長門で義隆と行動を共にしていたことになる。

このように三つの説がありますが、『大内義隆』の著者福尾猛市郎氏は、『大寧寺過去帳』を引きながら義隆に殉じた人々の中に杉興運を数えていません。そして『大内義隆記』の記述を妥当としています。やはり、この時、陶の軍勢に攻められて高鳥居城は落城したと考えてよいのではないのでしょうか。

なお、『福岡県史』では「粕屋浜あるいは津屋村で自刃したという」と書いて、場所は前二説を採りながら、第三の説から自刃説を採り入れた説となっています。『歴名土代』にも天文二十年九月九日に「自害」とあり、自害説も一概に否定できません。

(6) 杉氏と高鳥居城

杉興運の死後、国人領主となった杉氏の子孫は、なお高鳥居城を支配しながら、鞍手郡龍徳村の龍ガ岳城と「かけ持」にしていた、と「筑前国続風土記」などに書かれています。

高鳥居城は杉豊後守興行がとり立てて居住し、その後は鞍手郡龍徳の城から（龍ガ岳城に本拠を置いて）杉弾正忠重並、同権頭連並と相續いてかけ持にしてきたが、ある時秋月氏によって高鳥居城を攻めとられたのでした。これより以後は、杉氏は龍ガ岳城を守るようになり、秋月氏に従いました（筑前国続風土記）。豊臣秀吉が九州平定のため大軍を率いて九州に乗り込むと、島津氏に属していた秋月氏が秀吉に降服、秋月氏のもとにあった杉氏も人質を献じ、土産をささげて秀吉に降参しました（黒田家譜・巻四）。

古文書の上で杉氏の家系をたどると次のようになります（親子関係が確認できるのはBとCのみ。いずれも弾正忠・豊後守という官途を共有することから系譜上の関係はあるはずである）。

「続風土記」など江戸時代に編纂された地誌や軍記類では次のように親子関係が描かれ、上に想定した系譜とは食い違いを見せています。

興行 — 重並 — 連並

筑前の杉氏についてはこのほかにも諸説ありますが、大きく分けて大内氏の分流である周防の杉氏と、筑前国人の杉氏との二つの流れがあり、しかもこの二つの杉氏はたがいに交錯して筑前守護代の一族をなしているように思われます。杉氏の系譜の確定はきわめて困難です。

(7) 星野兄弟と高鳥居城

およそ四百年ほど前、天正十四年（1586）八月二十五日、島津氏のしんがりとして高鳥居城にこもる星野兄弟を、立花城から打って出た立花統虎が攻撃、星野勢全員が討ち死にしました。この合戦は豊臣秀吉による島津氏討伐（九州平定）の一環で高鳥居城三百年の歴史に最期のページをかざった戦いとなりました。

これより先、九州制圧をめざす島津氏は五万の大軍を率いて四王寺山の岩谷城を攻めました。名将高橋紹運のこもる岩屋城ですが、七月二十七日ついに落城、紹運は七百六十余の部下と共に壮絶な最期を遂げたのでした。島津軍は次に高橋紹運の実子、弱冠二十歳の立花統虎が守る立花城を包囲しました。立花山の麓に広がる香椎宮に乱入して火をかけ、本殿も楼門もことごとく焼き尽くしました。この時期先頭に立ったのは星野兄弟でした。

一方、大軍に包囲された統虎は、少しも屈する気配を見せず、二十日近くも籠城のまま、ひたすら秀吉の援軍を待ちました。

八月十六日、秀吉から大友氏救援の命を受けた毛利勢が九州に上陸、急報を得た島津勢は秀吉の脅威を恐れて立花城の囲みを解き、ただちに退却を開始しました。島津は博多の町を焼き払い、立花勢の追撃を断つため、高鳥居城に星野兄弟をこもらせました。数年、空城であったので、にわかごしらえの普請だったということです。

二十五日早朝、島津氏の城代としてたてこもる星野吉実・吉兼に対し、父高橋紹運を殺されてとむらい合戦の意気に燃える若武者立花統虎が戦いを挑みました。立花城（新宮町と福岡市東区にかかる立花山頂）を打って出た立花の軍勢は、巳の刻（午前十時）には高鳥居城の麓に到着、ときの声をあげて攻め寄せました。

統虎は高鳥居城を見おろす若杉山の山頂に布陣、500人の軍勢で城の大手（正面）の十間戸樋から攻めにかかる。一方、からめ手（裏門）には統虎応援にかけつけた小早川隆景の兵200が須恵村からよじ登る。星野兄弟はかねて勇猛のほまれ高く、そのうえ城兵200の中には訓練された鉄砲隊も加わっていて、必死の抵抗に寄せ手にも戦死者が続出する有様でした。銃弾は統虎の親近をかすめ、また寄せ手に加わっていた宇美の住人宇美善四郎も鉄砲にあたって死んでいます。

立花勢が城内に乱入し、城は燃えあがりました。星野吉実は立花次郎兵衛と槍を合わせているところを十時伝右衛門に斬り伏せられ、打ち取られました。十時は吉実の首を取りますが、届け出の

際次郎兵衛に功を譲りました。統虎は後にこのことを知り、陣中の美談として兩人に感状を与えています。

秀吉が若き統虎の手柄に感心し、「星野兄弟を初め、数百人討ち取ったのは御苦勞であった」「まことに九州第一の武士である」と激賞したのは有名な話です。統虎はその後も秀吉の島津攻めに功をあげ、筑後柳河を与えられました。統虎は、後に筑後柳河10万石の藩主となった名将立花宗茂です。

福岡市博多区吉塚の地名は、高鳥居落城の際、星野吉実・吉兼兄弟の首がその地にうめられたことから起こったものと伝えられています。「吉実首塚」から吉塚という地名になったという説で、吉塚地蔵堂の左手にはその由来を記した「吉塚碑」も建っています。吉塚地蔵堂は星野兄弟の首塚に、元禄のころ妙蔵尼が地蔵菩薩をおいて落武者をなぐさめたものだそうです。

なお、城址に近い岳城山腹には、昭和五年上須恵区民の手で『竹城々址碑』（文は元教員勝野藤太、書は郷土史家小山田遊谷）が建てられました。最近、すぐ横にらんで供養塔が建ち、清滝にも『高鳥居城武士之霊塔』があります。これは昭和十七年に鹿児島県の人建てたものです。わが町の地蔵などで、落武者の伝説を伝えているものは各所に残っています。

(注) 星野兄弟の名については中務大輔吉実と民部少輔吉兼とするのが普通ですが、『筑後将士軍談』に収める星野系図によると、これは誤りで中務大輔鎮胤と民部大輔鎮元とするのが正しいとされています。本稿では通説に従いました。

なお、史料集『大宰府・太宰府天満宮・博多史料』続中世編八の天正十四年八月二十五日の項には二十二の関係史料が収められています。

～高鳥居城関係資料年表～

永仁元年（一二九三）三月

河津孫次郎貞重（のちに筑後守）、筑前に来て粕屋郡迫門河内七百町を領する。高鳥井ノ壘を新築し鎮西探題付属の城とする。（河津伝記＝『宗像郡誌』所収）

乾元元年（一三〇二）四月

河津貞重の子・駿河守重房、高鳥井城より宗像郡西郷庄に移り、飯盛山城を守る。（河津伝記）

乾元元年の頃

鎮西探題への不満をおさえるため鎌倉幕府から派遣された宇都宮下野前司貞朝、高鳥井城を守る。（河津伝記）

観応元年（一三五〇）二月十日

筑後の住人黒木兵庫介種長、博多を攻略しようと大兵を率いて箱崎に押寄せ、社坊（宮崎宮）を焼討ちする。高鳥井の城将宇都宮・麻生・山鹿の人々、これを聞いて討捕ろうと計画し、穂波越の山道を引退く黒木勢を篠栗山にさえぎる。（河津伝記）

正平十六年・康安元年（一三六一）七月

南朝方「新将軍宮吏部親王」、肥・筑・薩・隈・日の兵三万余を従えて筑前に入る。迎え撃つ太宰少式頼尚は宝満岳を要害とし。天拝岳を宰府砦とし、宗像・若杉・一瀬・岩門・飯盛・細峯・荒平の各城を宰府の後援とする。（歴代鎮西要略、藤田明『征西将軍宮』）

建徳二年・応安四年（一三七一）

今川了俊が九州探題となる。（応永二年<一三九五>まで在住）

高鳥井城は今川了俊まで九州探題の付城とする。（河津伝記）

永和五年（一三七九）三月十三日

今川了俊、須江庄半分を薩摩守護島津伊久に与える。（九州探題今川了俊貞世書下＝大日本古文書『島津家文書』所収、藤田明『征西將軍宮』）

宝徳二年（一四五〇）八月二十一日

井原弥七（宗全）高鳥井城料所として那珂郡内幡差分三町の地を給与される。（筑前国守護代仁保盛安奉書＝井原元彦氏所蔵文書）

同八月三十一日

井原安芸入道宗全、「大内領筑前菅領」として高鳥城を居住とする。（井原家系＝森山恒雄「史料紹介井原家文書」）

長祿元年（一四五七）三月三日、七月二十三日

高鳥居城の城誘（修築）につき、奉行となった井原宗全の「日夜粉骨」「長々辛勞」の働きに、大内教弘より感状を与える。（大内教弘感状＝井原元彦氏所蔵文書）

長祿二年（一四五八）十一月二十五日

高鳥居城料所・篠栗内二町などの地を、井原太郎が祖父井原宗全より相続する。（大内教弘知行安堵状＝井原元彦氏所蔵文書）

文明十年（一四七八）十月四日

大内政弘、高鳥居城の調査・修築のため、久芳三川守吉清・久芳掃部助永清・矢野丹波守盛重・河野豊前守・山近次郎左衛門尉・此外尾州家人一兩人を派遣する。（相良正任「正任記」）

同十月七日

大内政弘、高鳥居城の「屏矢倉」配当のため御家人は「給地分限」をそれぞれ書き上げて差し出せ、と触れをだす。（正任記）

同十月十九日

河津掃部充弘業、近日高鳥居城の城誘のため在郷する。（正任記）

明応五年（一四九六）十一月下旬

大友・少弐の軍勢、立花・麻生を先鋒とし高鳥井城・飯盛城を攻める。河津左衛門大夫弘業・嫡子与三光種・次男六郎綱家・深川右京・阿野弾正忠・遠藤刑部・石津彦四郎ら数百騎で防戦する。河津弘業は飯盛城に戦う。光種・綱家兄弟は二重三重に囲まれた高鳥井城を守り敵兵を追いくずす。（河津伝記）

明応六年（一四九七）十一月一五日

大内義興、須恵村の内二〇町の地を杉木工助弘依に与える。（大内義興袖判宛行下文＝杉隆泰家文書）

明応七年（一四九八）十一月

大内方、岡部彦左衛門尉、この時より翌八年十一月二十一日まで高鳥居城に在住する。（児玉鞆採集文書）

同年十二月五日

大友氏の下地に従う少弐氏の軍勢が高鳥井城を襲う。守る大内方の武将神代紀伊貞総は千騎ばかりでたてこもり、寄せる敵を追い払う。(宗像記追考＝『宗像郡誌』所収)

享祿二年（一五二九）八月十六日

満盛院御神領の早良郡正覚寺領をめぐる争い（相論）に関し、大内氏守護代杉興長が守護所（＝高鳥居城）において当事者双方の意見を聞き、裁定を下す。(杉興長被官連署状＝太宰府天満宮満盛院文書)

天文五年（一五三六）十二月

早良郡生松原の百姓某が、代官の不当な措置を高鳥居城に訴え出る。(某申状案＝青木文書)

天文六年（一五三七）

若杉村大祖山延年寺・石泉寺が火災にあつて仏閣が灰燼となったのを、この年に「杉弾正忠平朝臣興運」が再興する。(筑前国表粕屋郡若杉村大祖山延年寺石泉神軀仏像経巻再興記＝『筑前町村書上帳』所収)

天文十三年（一五四四）三月五日

大内義隆、太祖山の「竹木採用」、殊に神木「杉樹」の伐採を禁ずる。(大内義隆下知状)

天文二十年（一五五一）九月

大内義隆、重臣陶隆房の乱で山口を逃れ、大寧寺に自害する。大内氏の筑前守護代杉豊後守興運は義隆の側についたため陶氏の討伐を受け、若杉山を落ち行き、カスヤノ浜で討たれる。(大内義隆記)

同年十一月四日

隅田藤次郎、御家人として「高尊居御城番」を勤めたいと毛利房広に懇望。(房広吹拳状案＝石清水文書)

天正十四年（一五八六）八月二十五日

岩屋城・宝満城を落とした島津氏の大軍、豊臣秀吉が来援と聞き立花城の囲みを解いて退却を開始。島津の城代星野吉実・吉兼兄弟（筑後、星野村の住人）のこもる高鳥居城は、島津勢を追撃する立花統虎らの攻撃を受けて一日で落城する（筑前国続風土記、など）。百八十余の首塚をつく（史料豊前覚書）。

第5章 筑前高鳥居城の縄張りとは戦国後期の地域情勢

はじめに

高鳥居城は、1586（天正14）年の島津氏の北上に際して、城を守る島津方の星野氏を立花山城主立花統虎（後の柳川藩主立花宗茂）が攻め落したことで有名な城郭である。頂上には戦死した星野氏兄弟を顕彰する碑などが建てられている。高鳥居城は筑前の戦国史では必ず登場する山城であるが、縄張りの分析や筑前の戦国史における位置付けについては管見の限りみられない。本論は、拙稿「筑前高鳥居城の縄張り構造と国人勢力の結集」をもとに高鳥居城の特徴についてまとめたものである（1）。

戦国後期の高鳥居城

高鳥居城の城域は現在、福岡都市圏の東部、粕屋郡須恵町と篠栗町の境となっている。戦国期には筑前国糟屋郡に属した地域である〔図1〕。城の位置する岳城山（標高381.4m）は福岡平野の東南部を隔する若杉山系にある。北東には山岳寺院を擁する若杉山が連なる。城の北側には迫門河内（多々良川流域）が広がる。迫門河内は戦国期には杉氏や秋月氏といった東部の国衆が支配を伸ばした地域である。一方、西南山麓は須恵河内（須恵川流域）・宇美河内（宇美川流域）が広がり、立花氏が支配を伸ばした地域である。立花氏は1578（天正6）年に秋月方についた宇美八幡社の領主層を攻め、立花方に従わせている。

このように立花氏と秋月氏という敵対勢力の境に位置した高鳥居城であるが、文献史料は1586年の高鳥居城攻防戦関連の感状類がほとんどである。それ以外では、断片的な史料や後世の編纂資料でうかがえる程度である。「筑前国統風土記」（2）には「若杉山の西、植木村の上にあり、上に城址二段あり」とある。大内氏の家臣杉豊後守興行がとり立て居住し、後に鞍手郡龍徳城主杉重並・連並の持城となったこと、或時秋月氏が攻めとったことが記されている。そして天正14年の様子については「此高鳥居の城は、近年空城にてありしを、秋月方よりこしらへて、立花押への為、筑後国の住人星野中務少輔吉實・舎弟民部少輔吉兼を籠置ける」とある。

16世紀半ばの高鳥居城は大内氏の筑前支配の拠点として、筑前国守護代が在城したことが確認されている（3）。地勢的に、福岡平野から筑前東部・豊前北部へ通じるルート上の拠点として取り立てられたものとみられる。杉氏は興運（興行力）が筑前国守護代として入部し、大内氏滅亡後は筑前東部・豊前北部に土着し地域領主として活動する。永禄年間頃には連絡は豊前の香春城に在番し、糟屋郡は御笠郡の高橋鑑種が支配を伸ばしている（4）。これ以後、鞍手郡の杉氏の影響力は多々良川上流の迫門河内までしか及ばず、高鳥居城の戦略的重要性は薄れたとみられる。

1578年の大友氏耳川敗戦を受けて、筑前東部の国衆秋月氏は糟屋郡の大友方勢力立花氏と対立し、糟屋郡東部・西南部の国衆・小領主層に影響力を伸ばす。秋月氏は鞍手・嘉穂・穂波郡と糟屋郡境にかけて立花方と度々抗争するなど積極的な軍事活動をみせる（5）。しかしながら、この時期には高鳥居城は「空城（草城）」として機能を停止している。これは若杉山から連なる山塊に宝満城・頭巾山城を御笠郡の高橋紹運（立花統虎の父）が抑えていたために、敵対勢力の足場にならなかったためと考えられる。

天正14年6月～8月にかけて島津勢は筑前・筑後方面へ進攻し、抗戦した高橋紹運が戦死してい

る。島津方についた秋月氏が旧高橋領（御笠郡）を獲得すると、高鳥居城周辺は立花氏との最前線になった。この時、秋月種実は島津方に対して「立花一城之事」は秋月・草野・星野・原田・宗像などで対処するので「御心遣入間敷由頻被申候」と伝えている（6）。島津勢は豊後方面へ転戦するため8月下旬に撤収し、その後の立花山城攻めは島津方に参戦した九州北部の国衆が担うこととなった。秋月氏はその中心的役割を担い「筑前国続風土記」にある「秋月方による立花押え」を進める。高鳥居城に拠った星野鎮胤・親胤兄弟（地誌類では吉實・吉兼と記される）は筑後北部の国衆であるが、天正中後期を通して秋月方として行動する。高鳥居城は対立花氏の最前線として秋月方勢力に取り立てられたことがわかる。

この秋月氏を中心とする国衆の攻勢に対して、立花統虎は8月25日の島津勢撤収直後に高鳥居城を急襲する。立花方の急襲に高鳥居城は陥落し星野兄弟は戦死する。攻勢に出た立花勢は御笠郡を奪取するなど大きな戦果を挙げた。この高鳥居城攻めは豊臣政権に高く評価され立花氏が筑後柳河にて大名に取り立てられる要因となっている。このこともあって、高鳥居城攻めについては立花氏側に多くの記録が残されることになった（7）。その反面、星野氏をはじめとする秋月方の動向は断片的なものになってしまった。

豊臣政権による九州国分け後は高鳥居城は用いられておらず、慶長国絵図にも「高鳥居古城」と記されている。よって、高鳥居城の現存遺構は城が戦場になった1586年段階と考えられる。

高鳥居城の縄張り

〔図2〕をもとに高鳥居城の縄張りをみる。主郭部にはテレビ電波塔や今回発掘対象となった展望台、そして星野氏顕彰碑などがある。城域にはこれらの整備に伴う破壊箇所がかなりあり、高鳥居城の資料的価値を損ねる結果となっている。

曲輪Ⅲではテレビ電波塔や展望台によって地表面が攪乱されている。城内を走る林道は連続堀切や曲輪Ⅱ・Ⅲの南側斜面部分、各曲輪の虎口想定部分を見事に破壊している。加えて、林道の終点から岳城山山頂に通じる登山道が曲輪Ⅰの南斜面を削り込むことで、開口部を破壊している。このため、曲輪Ⅰ～Ⅲの虎口部分の読み込みを極めて困難なものにしている。これらの破壊は、山上の星野氏顕彰の石碑を含め一連の整備作業の結果と思われる。いずれにしろ、遺跡の十分な把握なしに進められた顕彰・整備作業が遺跡の持つ資料的価値を損ねることを教訓とする必要がある。

高鳥居城の城域は、標高381.4mの岳城山〔図中Ⅰ〕と、標高369.8mの曲輪Ⅲ、標高347.8mの曲輪Ⅴの3つのピーク部分から構成される。

最も高い位置にある曲輪Ⅰが主郭部と想定されるが、峰の対岸にはほぼ同程度の高さを持つ曲輪Ⅲがある。曲輪Ⅰと曲輪Ⅲはどちらが主郭部なのか俄に把握しがたい。その間には四段の曲輪Ⅱ-1～4が連なる。そして西側に独立した曲輪Ⅴがある。須恵側にあたる東側・南側斜面からの侵入に強い警戒心を持っており、東側尾根は巨大な堀切で切断した上に無数の畝状堅堀群を築いている。

岳城山にある曲輪Ⅰ-1は15m×20m程度の規模である。一部顕彰碑によって破壊されるものの土塁d1が曲輪を廻っている。北西側に以前の道が通じており、虎口が想定される。北西側を下った箇所に曲輪Ⅰ-2がある。曲輪の前面は土塁d2で囲まれており、尾根筋に浅い畝状堅堀群u1がみられる。また西側に曲輪Ⅰ-3がある。南側の曲輪Ⅱ-1に面した斜面にも畝状堅堀群u2と浅い堀切h1が配されている。一方東側には堀切と思われる地形h2がみられる。岳城山の東側には若杉

山へ続く峰が連なるが、この方面に対しては遺構は確認されない。岳城山が城域の東端と考えられる。

曲輪Ⅲは谷を挟んで曲輪Ⅰの西側にある。大きさが30m×60m規模の曲輪である。林道によって破壊を受けているがほぼ長方形の形状がある。曲輪の塁壁には土塁などはみられない。曲輪Ⅲの北側には足場となる箇所曲輪Ⅵが築かれている。この方面からの侵入に対する橋頭堡的役割を担う。

曲輪Ⅰと曲輪Ⅲの間には四つに分節された曲輪Ⅱがある。この内、曲輪Ⅱ-2・Ⅱ-4が高い位置にある。曲輪Ⅱ-3は曲輪Ⅱ-2と曲輪Ⅱ-4をつなぐ馬蹄状地形を曲輪化したものである。この曲輪Ⅱ-1～4の南東側塁壁にはそれぞれ土塁d3～d8が連なる。d6・d7間が崩落のため途切れているが、構造的にはd3～d8まで四つの曲輪を貫いて土塁ラインが形成されている。

この土塁ラインに対応して構築されているのが、300mに及ぶ長大な畝状堅堀群である。曲輪Ⅱ-1の東端に対応した堅堀h3から、曲輪Ⅱ-4に対応した堅堀h10の間にu3～u6まで畝状堅堀群が築かれている。これにより、東南斜面に曲輪Ⅱ-1～4に対応した長大な防塁型ライン（土塁＋畝状堅堀群）が形成される。この畝状堅堀群は上部の曲輪壁面から一定の距離を保ちながら連なっており、防塁型ラインが一気に築かれたことを窺わせる。

この防塁型ラインは東南部の尾根筋で屈折しており、東面部分と南面部分に分節される。東面部分では、東に伸びる二本の尾根筋を切断した巨大堀切h5・h6と横堀h4の切岸がほぼつながっている。そして畝状堅堀群が緩斜面と堀底を破壊する。これにより幅10m余りの巨大な横堀ラインが形成されており、東側からの侵入を完全に遮断するかたちとなっている。

この横堀ラインでは、随所に多様な畝状堅堀群の使いこなしがみられる。東北側の畝状堅堀群u3は横堀h4及びその切岸と組み合わせ、[土塁壁（切岸）＋横堀＋畝状堅堀群]のラインを構成する。一方、畝状堅堀群u4は、堀切h5と堀切h6の間にある突出した地形を破壊する目的で築かれ、横堀ラインの強化を意識した使いこなしが成されている。このように、東面の防塁型ラインでは畝状堅堀群を核とした縄張り技術が展開された。

巨大な横堀ラインの一角を担う堀切h5・h6はいずれも深さが4m以上あり、尾根を完全に切断している。さらに堀切h6の南側には、深さ2m前後の三本の連続堀切（図中h7）が築かれており、過剰なまでに徹底した防御が施されている。高鳥居城の東南部は広い尾根筋となっており、この方面からの侵入に強く意識したことが読み取れる。

一方、南面については、上部の曲輪に対応して長い堅堀と畝状堅堀群が組み合わされた[土塁壁＋畝状堅堀群]の防塁型ラインが築かれている。堀切h6が派生した堅堀h8と、堅堀h9・h10が深さ2～3m規模で掘り込まれ、その間を畝状堅堀群が密集して配されるパターンから構成されている。長い堅堀は上位の曲輪Ⅱ-3・Ⅱ-4に対応しており、それぞれの堅堀群をユニット化している。非常に高い規格性を窺わせる技巧的な配置である。

曲輪Ⅲと曲輪Ⅴの間にある馬蹄状地形Ⅳには、堀切状の地形Ⅳ-1や削り残しの基壇Ⅳ-2・Ⅳ-3がみられる。おそらく当初は、何本かの堀切が乱雑に配されていたものと思われる。その後、地勢的に放置できなくなったものの、曲輪化するまでには至らず、畝状堅堀群や乱雑な掘り込みを入れ、足場にならないように破壊したものと思われる。Ⅳを曲輪化しない点では消極的な処理と言える。その分、南面に畝状堅堀群u7～u9が密集して配されるなど、Ⅳへの取り付けを強く嫌っており、

曲輪化しないものの放置はしないという防御側の意向を読み取ることができる。

曲輪Vは山頂部を削平した単郭の曲輪である。曲輪Vの北側には堀切h14がある。西側に伸びる尾根筋に対しては、両側から堅堀を配して土橋状に狭め、尾根伝いの侵入を遮断している。特に堅堀h12は深さ3m余りの規模を持ち、背後の畝状堅堀群u10に連なっており、南斜面への周り込みを妨げている。さらに外部には浅い堀切h13がある。これより西側には遺構はみられず、これが城域の西端にあたる。

以上のように、高鳥居城は東西500mの範囲に複数の核を持つ曲輪群と、それに対応した長大な畝状堅堀群・土塁・横堀を駆使した防塁型ラインが連なる巨大な城郭と位置付けられる。

高鳥居城の縄張り構造～畝状堅堀群と土塁の技法から～

この節では、高鳥居城の縄張り構造について畝状堅堀群と土塁の技法に着目し、縄張り論の観点から周辺事例との形態論的比較を行う。そして、その上で文献史料による年代比定を勘案しつつ、指標としての高鳥居城の有効性を示す。

まず高鳥居城の畝状堅堀群をみると、個々の堅堀はほぼ同じ長さ、均等間隔に配されるなど整然とした規格性が読み取れる。また、畝状堅堀群を核とする防塁型ラインの創出や効果的に長短の堅堀群の組み合わせるなど、技術的な使いこなしが随所にみられる。このように高鳥居城における畝状堅堀群の技術的水準は極めて高い。

高鳥居城でみられる畝状堅堀群の技法については、北部九州にて多くの類例が確認される。曲輪II-1の東斜面にある〔土塁壁（切岸）+横堀+畝状堅堀群〕の組合せ〔図中h4、u3〕は、長野城（豊前規矩郡）〔図3〕や益富城城塞群・古処山城（筑前夜須郡）〔図4〕・荒平城（筑前夜須郡）・米多比城（筑前糟屋郡）などにみられる。そして、曲輪II-2の東南斜面やIVなどで緩斜面を破壊し、障壁ラインの機能を果たす畝状堅堀群は、益富城塞群・長野城・岩屋城（筑前御笠郡）〔図5〕にみられる。さらに、南側斜面にある長短の堅堀を組み合わせた〔土塁壁+畝状堅堀群〕の組み合わせは、益富城塞群・古処山城や長尾城、香春城などにみられる。

これらの類例は北部九州の中でも筑前東部・豊前北部に集中する。この筑前東部・豊前北部が畝状堅堀群が発達した「畝状堅堀群」軍事的文化圏であったと考えられる。縄張り論の見地からは高鳥居城は「畝状堅堀群」軍事的文化圏に属する城郭であったことがわかる。政治的には畝状堅堀群が発達した筑前東部・豊前北部地域は、天正後期に拡大した秋月氏系勢力（秋月氏、豊前高橋氏など）の勢力圏と重なる。

年代的には「畝状堅堀群」軍事的文化圏の中で、高鳥居城は1586年に秋月方勢力の改修を受けた直後に落城している。また、高鳥居城と同様の技法が随所に確認される益富城塞群も同時期に秋月種実の隠居城として整備され、翌年に豊臣軍に攻略されている。両者の落城時期を踏まえると高鳥居城にみられる畝状堅堀群の技法は天正後期段階に多用された技術と位置付けられる。

以上のことから、当該地域に分布する畝状堅堀群の縄張りは天正後期に秋月方が使いこなししたものと推察される。高鳥居城を指標とすることで、天正後期の筑前東部・豊前北部には「秋月氏系城郭」とも言える技術的文化圏があったことが読みとれる（8）。

高鳥居城の縄張り分析からは豊前長野城などの城郭の年代比定も可能となる。豊前長野城は永祿期の長野氏の持城とされているが（9）、城のある規矩郡は天正後期に秋月氏系勢力の豊前高橋氏

が支配した地域である。また、豊臣軍が九州に入る際、1年以上にわたって対峙した最前線でもある。縄張りの高鳥居城など共通点が大きいことから、長野城は天正年間に秋月氏系城郭として改修を受けた可能性が高い。高鳥居城の縄張りからは、現存する長野城が天正後期に秋月氏系勢力によって改修された「秋月氏系城郭」であると位置付けられる(10)。

次に高鳥居城の土塁についても高度な縄張り技術をみる事ができる。岳城山の曲輪Ⅰをみると、曲輪Ⅰ-1・Ⅰ-2では土塁が単体の曲輪を囲い込む縄張りを持つ。これにより各曲輪が第一郭、第二郭と明確に分化されている。当該地域における土塁の技術は、防塁型ラインⅡにみられるように複数の曲輪を横断するものがほとんどである。その中で岳城山にみられる土塁の用法は、各曲輪と密接に結びついた縄張りをみせる。

ここで興味深いのは、この土塁の技法が星野氏の居城筑後鷹取山城〔図6〕の縄張りと同様である点である。逆に糟屋郡近辺ではこの技法をみる事ができない。星野氏の本貫地である筑後北部は、毘沙門岳城や辺春城のように土塁が城域を圍繞する「土塁」軍事的文化圏とも言える地域である。その中で各曲輪の分化と対応するまでに展開したのが筑後鷹取山城である(11)。おそらく星野氏入部と共に高鳥居城に導入されたものと考えられる。

ところで、これらの縄張り技術は元々、秋月氏や星野氏が在地の縄張り技術の中で培ってきたものである。しかしながら、彼らは本貫地以外の土地でも同様の縄張り技術を用いるなど戦国後期には地域を超えた独自の軍事的規範を生み出している。高鳥居城の縄張りは各地に分布した「畝状堅堀群」「土塁」両軍事的文化圏で展開した高度な縄張り技術が規範として導入された在地系縄張り技術の到達点であったと評価される。

高鳥居城の縄張り構造にみる築城主体の軍事構造

それでは、高鳥居城に割拠した国衆たちの軍事構造は如何なるものか、この点についても高鳥居城の縄張り構造から読みとることが出来る。

高鳥居城では高度な縄張り技術が駆使された一方で、各曲輪が横並びに配され主郭部がはっきりしないという特徴を持つ。全体の縄張りは岳城山と他の曲輪で大きく二分される。その内、後者は曲輪Ⅲと防塁型ラインⅡは「上位曲輪+分節化した下位曲輪群を持つ防塁型ライン」というセットで一体化したプランを形成している。

この曲輪Ⅲと防塁型ラインⅡにみられるセットは長野城にもみることが出来る。長野城では「上位曲輪+分節化した下位曲輪群を持つ防塁型ライン」のセットが三つ配されている。そして、これらの曲輪群を防塁型ラインが囲い込むことで広い城域が形成されている。曲輪配置の点からも高鳥居城と長野城の間には共通項を導くことができる。

このように、高鳥居城は主郭がはっきりしない求心性に乏しいプランである。しかし、こうした形態からは単体の城郭が横並びに結集した「城塞群」的な性格を読み解くことができる。この横並びな構造にこそ北部九州の国衆が結集した軍団の構造を如実に示している。

国衆の中心的存在であった秋月氏は、出兵直前の豊臣政権側から「筑前一国と筑後半国、豊前半国の屋形」として警戒されている(12)。秋月氏は勢力圏内にて地域性から脱した軍事的規範を持ったように、北部九州の既存の大名権力とは違う次元へ脱皮する動きを示す。高鳥居城はそうした過程で創出された城郭であり、横並びの構造はこの権力体としての成長過程が如何に急速なもので

あったかを如実に示している。

高鳥居城にて、秋月氏は畝状堅堀群の防塁型ラインという自らの軍事的規範の中に参戦した国衆・小領主層を囲い込み、秋月方として軍事的編成を計っている。その一方で、曲輪Ⅰの土塁ラインのように異なる規範の縄張り技術が貫入した点も注目される。強い規範性を前面に押し出しつつも、参戦した有力国人の独自性をある程度容認した上で、軍事行動を行わざるを得なかった秋月氏の状況が読み取れる(13)。このことは、急激な領主層の結集という事態を迎えて、秋月氏による統制が追い付かなかったことを示している。

高鳥居城のような縄張り構造は秋月氏の軍事的文化圏にも多数みられる。秋月氏が豊臣政権に最後の抵抗を試みた益富城城塞群の場合、黒田時代に改修された本城部分の北側には畝状堅堀群と土塁を駆使して峰上の曲輪群を貫く防塁型ラインが随所に構築されている。豊前長野城や肥前勝尾城下も防塁型ラインが内部空間の充実より先行した縄張りとなっている。

これらの諸事例から、戦国末期の北部九州においては、秋月氏・豊前高橋氏・筑紫氏などの有力国衆のもとに小領主層が結集し、強大な「国衆連合」的な軍団が形成されたものと考えられる。各城郭にみられる巨大な畝状堅堀群や防塁型ラインの存在は、彼らの連合体が極めて巨大な土木量を駆使した権力体であったことを示している。

その反面、これらの軍団はいずれも緒戦の敗北を契機にあっさりと解体している。実際、激戦が行われた高鳥居城が一日で落城すると、立花氏は旧高橋紹運領の恢復に成功している。また、巨大な防塁型ラインを築いた益富城でも、豊前岩石城の落城を受けて数日で自落するに至っている。

こうした軍団としての脆さを抱えたことは、この軍事的な「国衆連合」が余りに急激に形成されたために組織的な軍事編成が未成熟だったことに起因すると思われる。高鳥居城にみられる横並びの曲輪配置はまさにそうした「雪だるま」式の軍事的国人連合の在り方を如実に示したものと言えるだろう。豊臣政権側との対決という緊張状態が生み出した高度な軍事的連合体は、結果として軍事的成功に伴う権力体としての昇華をみることなく解体したと言える。

結び

以上のように、本論では高鳥居城の紹介と縄張り分析を行うと共に、筑前東部・豊前北部地域に広がる「軍事的文化圏」というかたちの縄張り技術の規範性の発生、及び秋月氏に代表される国衆・小領主層の軍事的結集などの地域状況について考察を進めてきた。

高鳥居城を含めて中近世移行期の城郭は、大名権力と国人・小領主層との緊迫した関係を読み解く上で極めて重要な資料である。そのまま織豊期における国衆一揆などに通じる問題だけに、今後とも城郭遺構の史的活用を進めていきたい。(了)

註

- (1) 中西義昌「筑前高鳥居城の縄張り」と国人勢力の結集」『城館研究論集 発刊準備号』(2001年、仮称城館学会)
- (2) 貝原篤信「筑前國統風土記」『筑前国統風土記』(1973年、名著出版)
- (3) 佐伯弘次「大内氏の筑前守護代」『九州中世史研究』二(1980年、文献出版)所収

- (4) 荒木清二「毛利氏の北九州経略と国人領主の動向」『九州史学』98号(1990年)
- (5) 城戸清種「豊前覚書」〔川添昭二ほか校訂『豊前覚書』(1980年、文献出版)〕、また一五八一年には秋月方勢力に対して、大友勢が筑後へ出兵しており、大友方勢力が反抗している。関連史料は竹内理三・川添昭二編『太宰府・太宰府天満宮史料』巻15(1997年、太宰府天満宮)天正九年の事項にまとめられている。
- (6) 「上井覚兼日記 天正丙戌八月日記」〔東京大学史料編纂所編『大日本古記録 上井覚兼日記』(1958年、岩波書店)〕
- (7) 高鳥居城攻め関連史料については、竹内理三・川添昭二編『太宰府・太宰府天満宮史料』巻16(2000年、太宰府天満宮)にまとめられている。
- (8) 北部九州の戦国期城郭については木島孝之・中西義昌「天正中・後期の北部九州における城郭の様相」〔鳥栖市教育委員会『戦国の城と城下町II』(1998年、鳥栖市教育委員会)〕、中西義昌・岡寺良『歴史史料としての戦国期城郭』〔2001年、花書院〕などがある。畝状堅堀群の展開については、木島・中西論文において、第Ⅰ段階〔畝状堅堀群の使用〕、第Ⅱ段階〔畝状堅堀群の多様化〕、第Ⅲ段階〔畝状堅堀群を核とした縄張りの発展〕とし、さらに第Ⅲ段階では〔土塁壁+畝状堅堀群〕〔石垣壁+畝状堅堀群〕〔横堀+畝状堅堀群〕の三つの用法がみられると提示している。
- (9) 千田嘉博「長野城の構造」、有川宜博「長野城合戦」『長野城』(2000年、北九州市教育委員会)所収]、千田嘉博「城郭防御の発達」〔町田章ほか編『考古学による日本歴史6、戦争』(2000年、雄山閣出版)所収]
- (10) 筆者は、永禄期の縄張り技術についてはそれぞれの技術については認識されていたものの、曲輪と単発的な堅堀・土塁の採用に留まったものと推察される。これについては推測の段階ではあるが、永禄期段階では立花山城などの拠点城郭にみられるように、国人・小領主層は大友氏や毛利氏が派遣した現地指揮官の軍事的動員下に強く拘束されたことが、在地における縄張り技術の展開を遅らせたのではないだろうか。縄張り技術の展開する契機となったのは、天正六年の耳川敗戦による大友氏勢力の後退に伴う国人・小領主層の自立化と考える。
- (11) 註(8) 中西義昌・岡寺良『歴史史料としての戦国期城郭』にて、筑後北部における土塁の発達をC-1類〔土塁による一体化を計る段階〕、C-2類〔土塁が城域を囲い込んだ段階〕、C-3類〔土塁が曲輪分化と対応する段階〕に分けている。筑後鷹取山城はC-3類に分けられる。
- (12) 「九州御動座記」(尊経閣文庫所蔵)〔九州史料刊行会編『近世初頭九州紀行記集』(1967年)〕
- (13) 星野氏は秋月氏の軍事行動に積極的に関わり、秋月氏の縄張り技術を導入した権力体である。しかし、その一方で独自の縄張り技術を展開するなど秋月方の中であって自らの独自性をみせる勢力でもあった。星野氏は秋月氏権力体の形成過程を考える上で注目すべき存在である。



图1 高鳥居城周辺図 (国土地理院 1:25000 篠栗を使用)

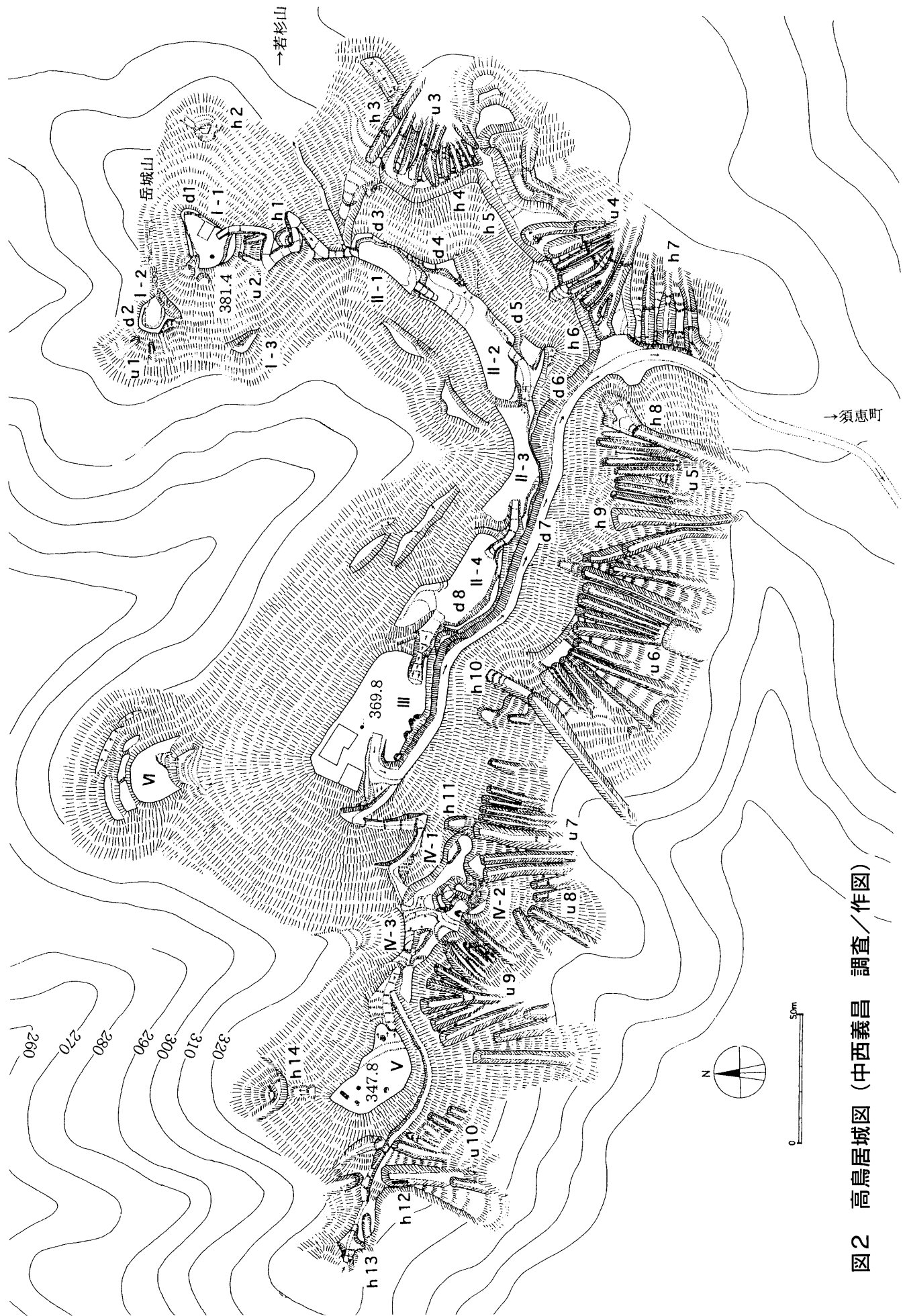


图2 高鳥居城図 (中西義昌 調査/作図)

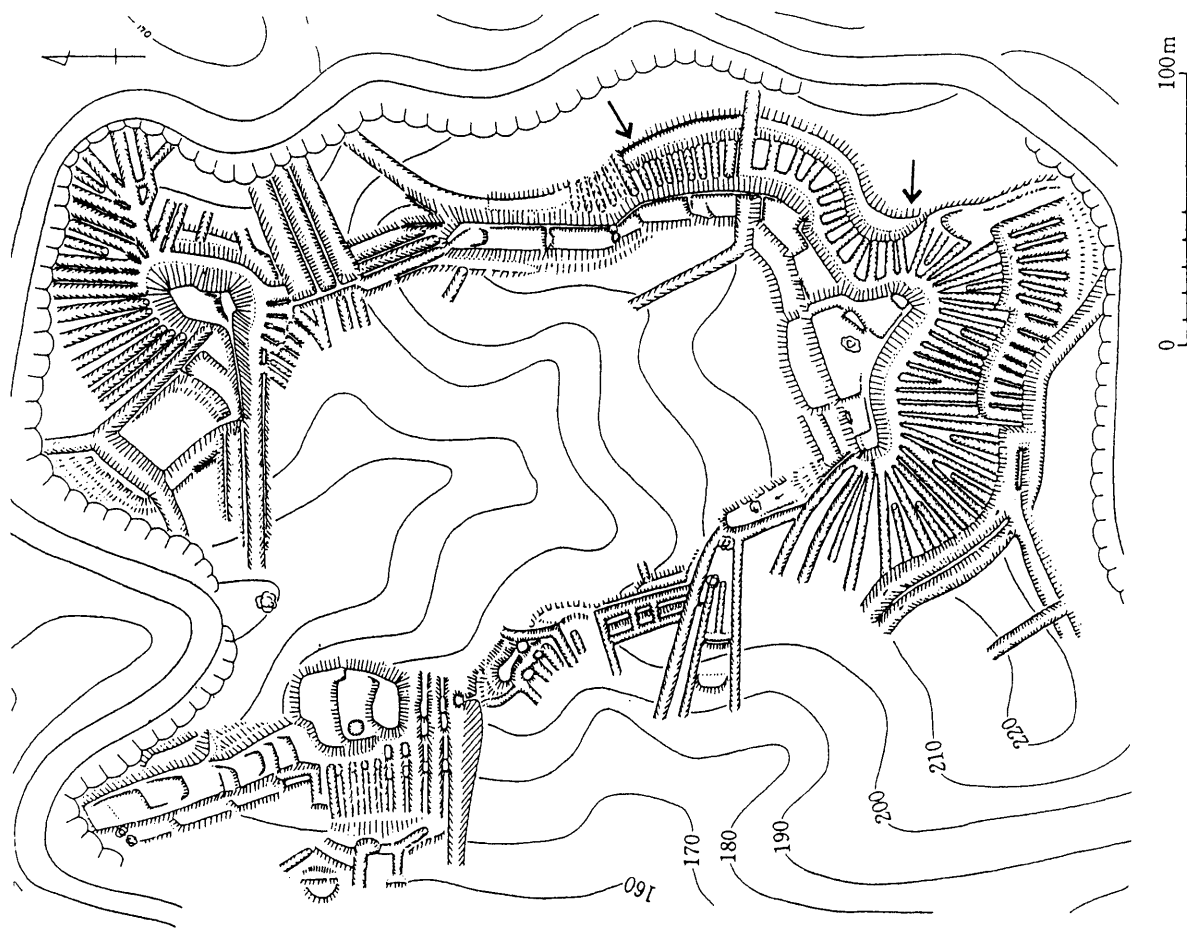


図3 長野城図 (村田修三・千田嘉博 調査/作図) 『城館調査ハンドブック』(1993年、新人物往来社) より転載

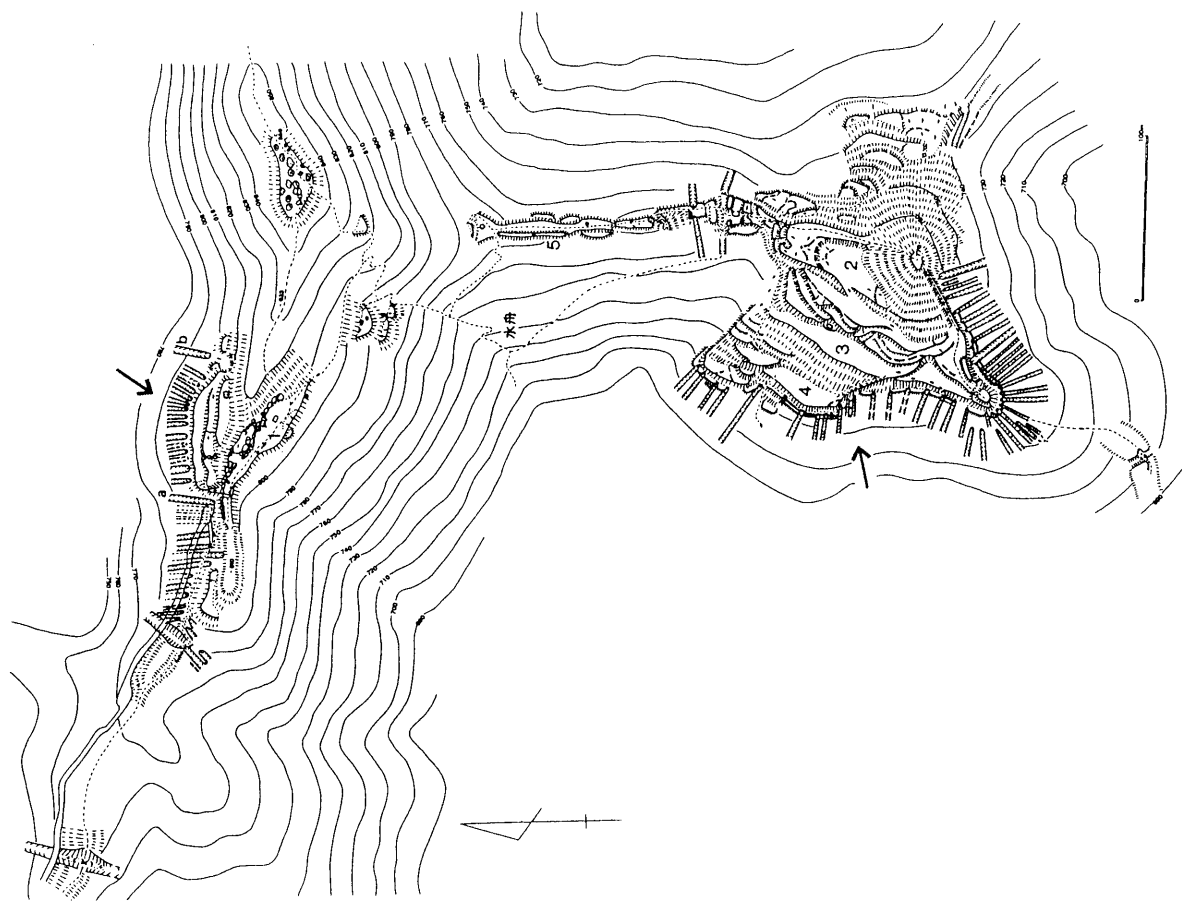


図4 古処山城図 (岡寺 良 調査/作図) 『歴史料としての戦国期城郭』(2001年、花書院) より転載

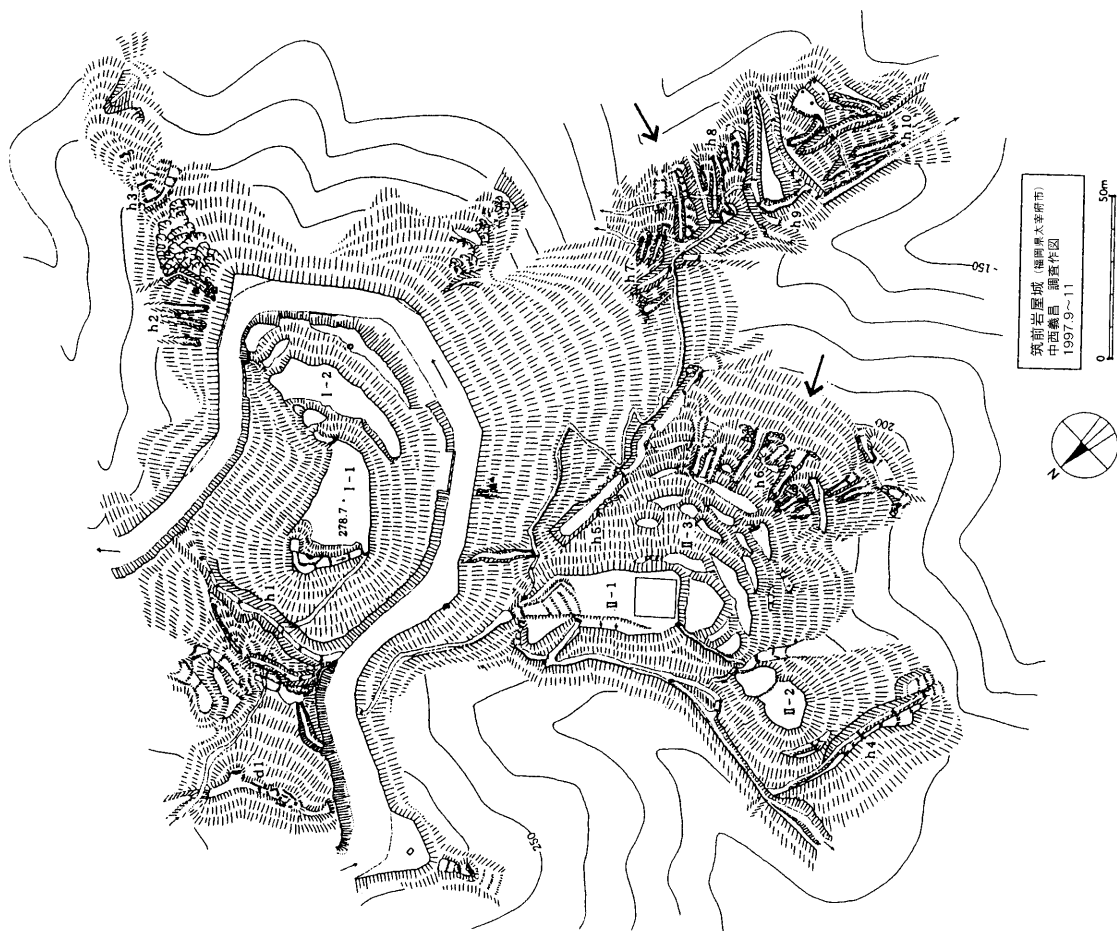


図5 岩屋城図 (中西義昌 調査/作図)

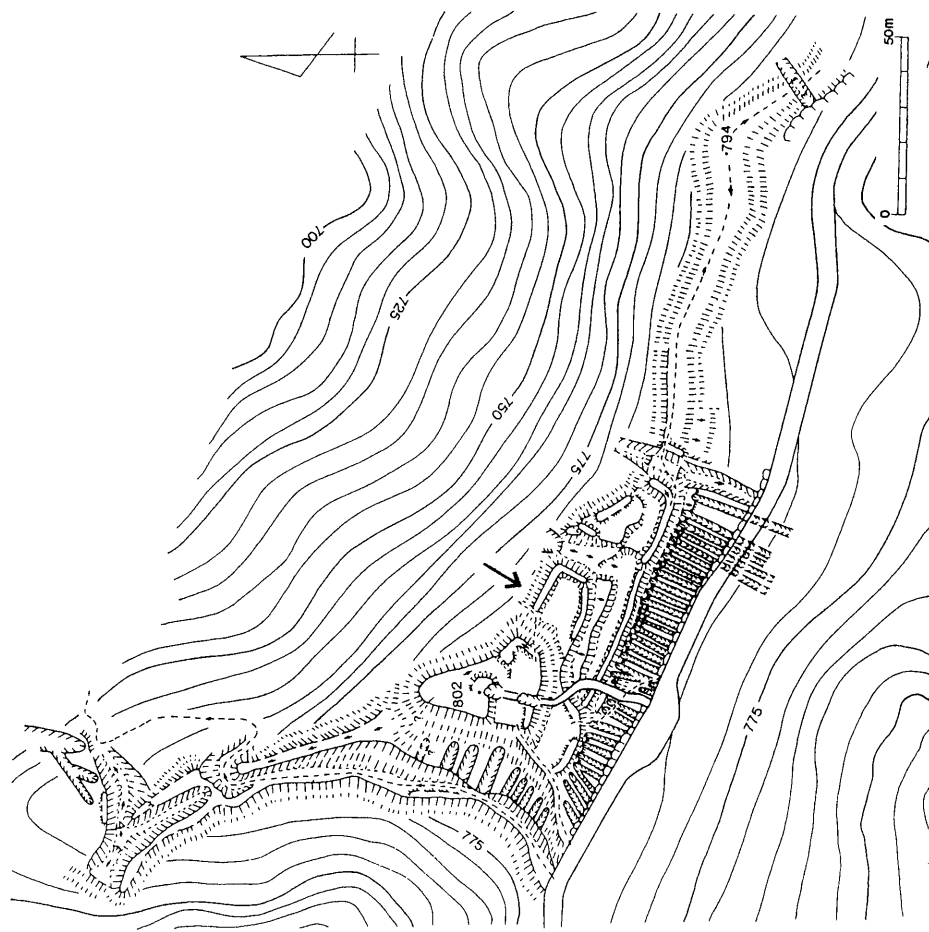
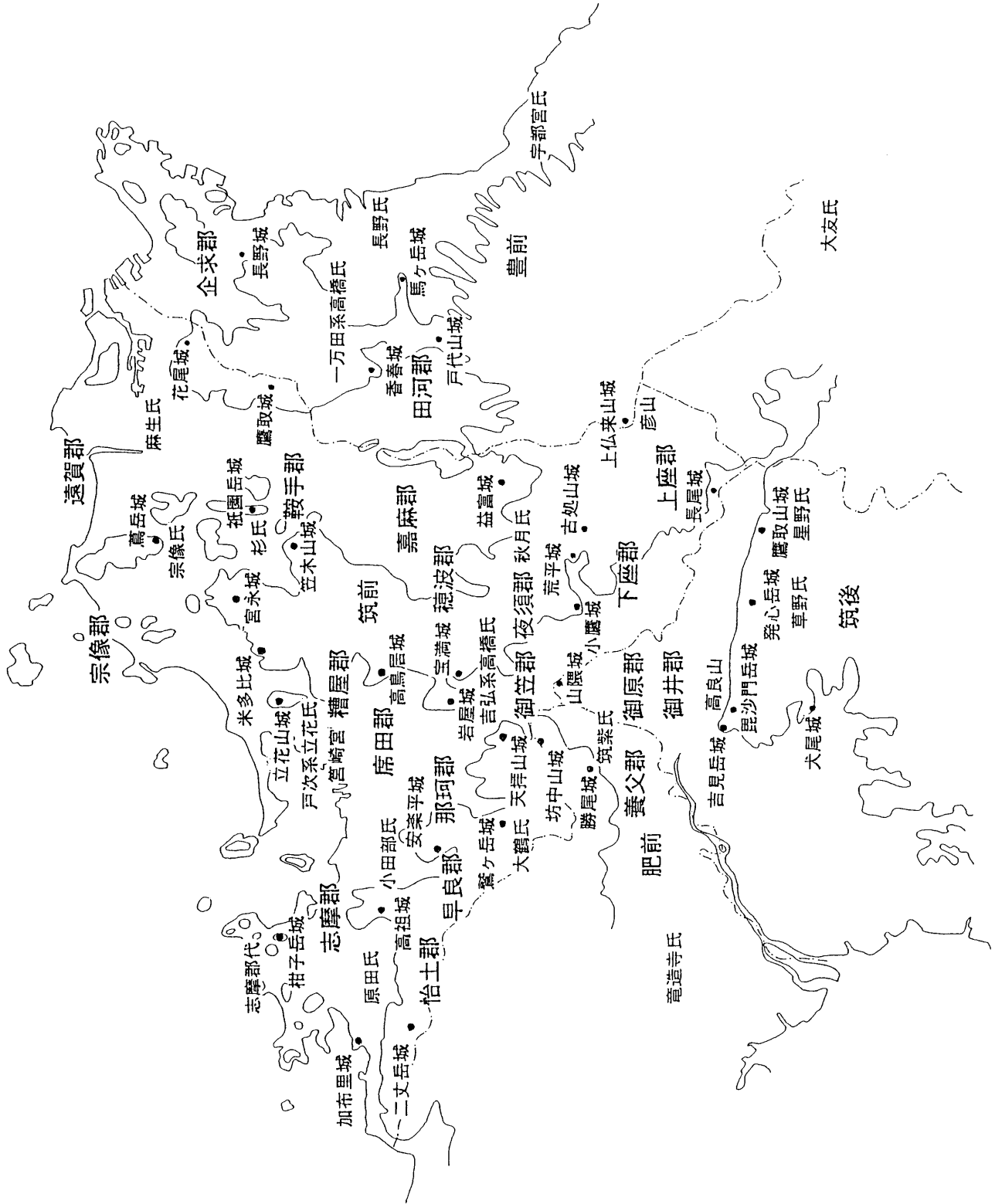


図6 筑後鷹取山城図 (岡寺 良 調査/作図) 『歴史料としての戦国期城郭』(2001年、花書院) より転載



北部九州の戦国期城郭

版 圖

1 高鳥居城跡遠景
(南西から)



2 高鳥居城跡からの眺望1
(北西を望む)



3 高鳥居城跡からの眺望2
(西を望む)





1 発掘調査前の展望台
(東から)



2 発掘調査地全景 1
(東から)



3 発掘調査地全景 2
(整地層除去後・北西から)



1 1・5号土坑(西から)



2 2号土坑(西から)



3 3号土坑(西から)



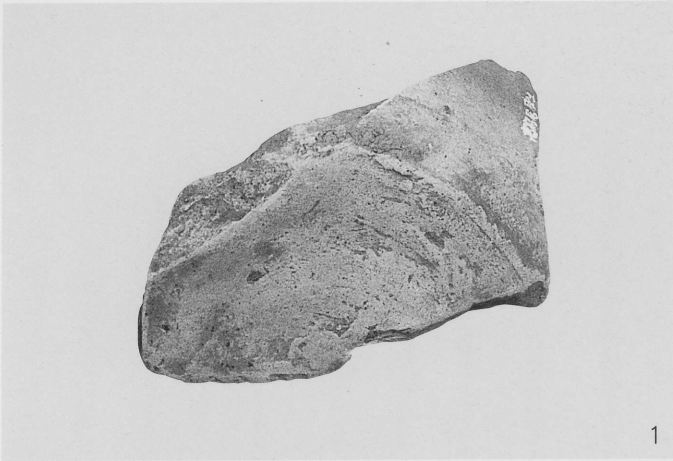
1 遺物出土状況



2 礎石? 検出状況
(北から)



3 散在する礎石
(北東から)



1



2



9



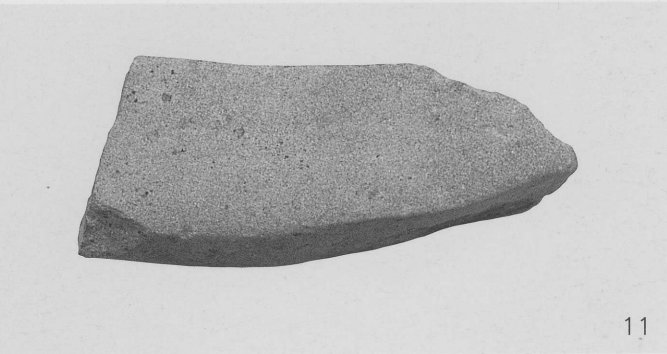
4



10



8



11

高鳥居城跡出土遺物



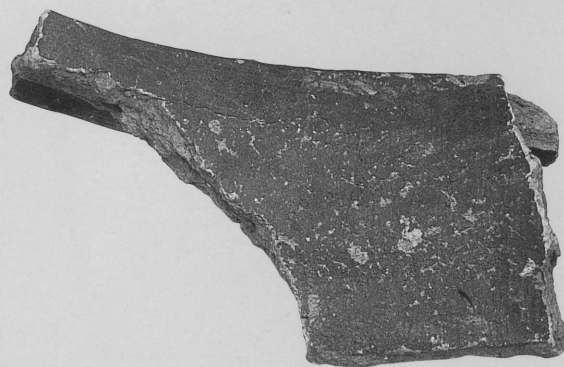
7



8~17



19



20



22



21



23



24

高鳥居城跡表採遺物2

報告書抄録

ふりがな	ちくぜんたかとりいじょうあと							
書名	筑前高鳥居城跡							
副書名								
巻次								
シリーズ名	須恵町文化財調査報告書							
シリーズ番号	第8集							
編著者名	吉村靖徳・中西義昌							
編集機関	須恵町教育委員会							
所在地	〒811-2114 福岡県糟屋郡須恵町大字上須恵1180-1							
発行年月日	西暦2003年3月31日							
ふりがな	ふりがな	コ ー ド		北 緯	東 経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号					
高鳥居城跡 <small>たかとりいじょうあと</small>	福岡県糟屋郡須恵町 <small>ふくおかけんさすやぐんすまち</small> 大字須恵1番地 <small>おほあさすまひんち</small>	403440	290085			2001.12.14 ∩ 2001.12.26	42m ²	展望台建替
所収遺跡名	種 別	主な時代	主な遺構	主 な 遺 物		特 記 事 項		
高鳥居城跡	山城	戦国時代	土坑・整地	土師器・陶器				

Chikuzen Takatorijjo Site

須恵町文化財調査報告書

第 8 集

筑前高鳥居城跡

平成15年3月31日

発行 須恵町教育委員会
福岡県糟屋郡須恵町大字上須恵1180-1

印刷 (株) 三光
福岡市博多区山王1丁目14-4